
戦国のセイバー

武士道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国のセイバー

【Zコード】

Z6963V

【作者名】

武士道

【あらすじ】

戦国の武将に憑依した、主人公が死んだ後に今度はFATEの世界に転生！？して、ハッピーエンドを目指す話。

こきなりセイバー！？（前書き）

こんにちは。武士道です。

最近、このアイディアが浮かんだので書いてみました。
よろしくお願いします。

こきなりセイバー！？

・・・・・・・・・

「ツツツ！貴様！！どこから現れた！？」

と俺に剣を振りかざしてくる少女・・・・・

「俺が聞きたいわああああ！」

俺は愛刀の百鬼兼光／ひやつきかねみつ／に手をのせて得意の居合
いの体勢をとつて、

「居合」・・・五月雨！――

「なつ！ぐつ・・・・・できる・・・・・

「おい、ガキンチョー！俺には闘つ意思はない！剣を納めてくれ・・・

・・・

「ガキンチョーとは何ですか！？私を馬鹿にするのですか！」「このま
ま闘つて勝てるのか？」・・・・・分かりました。信じましょう・・・
士郎。この人に害意は無いようです・・・・・

「そのようだな。なああんたの名前は？」

「俺か？・・・・・伊達政宗だ。よろしく・・・・。

やべえ・・・・・こいつ、士郎じゃねえか！そついえば、さつき闘つ
た娘もセイバーだし！とつとりあえず、状況を整理しよう！まず・・
・・・そうだ。俺死んだんだつた・・・そう、そうして俺は死んだ・
・・・ハズだつた・・・・・何故か俺はあの後、目が覚めたら戦国の世
に生まれて・・・しかも、憑依？した人物が伊達政宗だつたんだ
つけ？そうだ・・・・・そうして、俺は奥州を無事統一して徳川の世
になつて、そんで俺は病氣で静かに死んだ筈だ・・・・・確か・・・
・その後・・・・

『ああ～こいつ以外に面白かったんだけどなあ～。そうだーこの世
界におくつちやおーまあ・・・・・設定はこんなもんかな・・・・・ふふ
ふ・・・・・面白くなるぞあ～。』

・・・・・・・・・思い出した。誰だよ！あの野郎！絶対殺す・・・・・

しかし、設定ところのはじめことだ？俺がそんなことを悩んでいると

「伊達政宗！？それって、あの戦国時代の武将の！？」

「ああ・・・・・そうだ。ところで、君達の名前は？」

「ああ・・・・俺の名前は、衛宮 士郎。そして、こいつが『セイバー』です。』

「らしい？」

「ええ・・・・さつき、襲われていたときにこの娘が出てきて俺を助けてくれたんだ・・・・・そしたら、あなたが空から落ちてきたんだ・

・・・・」

「成る程・・・・・」

つて事はつまり、今はFATEの一番最初のところか・・・・・

「それで？その娘『セイバー』です！」・・・・・セイバーはこれからどうするつもりなんだ？」

「どうつて、『私はマスターのサーヴァントです。だから、一緒に住みます。』ええ！？」

「そつか・・・・・じやあ、士郎。俺もついでにいいか？俺、行くとこねえんだよ・・・」

「・・・・それなら仕方ないな。いいぜ、入ってくれ・・・・『士郎・・・敵です。』『誰か来ているようだな』えつ？」

「敵を討つてきます。マスター。」

そうして、セイバーは跳んでいった。士郎もあわててついて行つた。やれやれ、俺も行くとしますか・・・俺がつくとそこには、セイバーとアーチャーが闘つっていた。・・・・止めるか。そして、俺は一人に向かつて走り出した。

いきなりセイバー！？（後書き）

次回はヘラクレスります。

「ラクレス登場！？勝てる訳ねえだろーーー（前書き）

武士道です。

更新大変ですが・・・頑張ります。

「ラクレス登場！？勝てる説ねえだろー！」

「それにしても……俺、こんな武器もってたか？」

俺が持っていたのは知らないもう一本の謎の日本刀と一丁拳銃だつた。・・・なんか、戦国無双の伊達政宗の銃みたいだな・・・まあいいか。俺は、一人の所へ向かつて走っていた・・・

「はあああああ！」

「くつ！おおおおお！」「そこまでだ・・・一人とも」なつ！？」

俺は二人の喉下に刀を突きつけてた。

アーチャー視点

なんだ？こいつは・・・？だが、こいつからは危ない感じがする。うかつに動かない方がいいだろう。

「何者だ？貴様・・・」

「俺か？俺の名は伊達政宗だ・・・よろしくな。」

・・・・・伊達政宗だと？なぜ、戦国時代の武将がここにいる？これは、パラレルワールドとでもいうのか？

「おい・・・・」

「ああ・・・・すまん。考え方をしていた。」

「まあいい。とりあえず、戦闘は終了だ・・・士郎の家で話し合いと行こうじゃないか？」

「・・・・・そうだな。それでいいか？凛？」

「そうしましょ・・・2対1では分が悪いわ・・・

家のマスターも何とか理解してくれたようだ・・・それより、問題はこいつだな・・・・

セイバー視点

この人は、サーヴァント一人相手に気付かれずにここまで来れると・・・やはり、只者ではありませんね。出来ることのなら、敵に

なつてほしくないものです。

「おい！聞いてんのか！？お嬢ちゃん！？」

「なつ！？お嬢ちゃんとは何ですか！？私はセイバーと言つたで」「とつあえず、士郎の家で話し合おうじやないか？」つて話を聞いてください！」

「ん？ああ・・・すまない。お嬢ちゃん・・・「だから、セイバーと言つたでしょ！」「

私は思わず剣を振り下ろしてしまつた。まずい！

「はあ～短期だねえ・・・・・・またたく、昔の友を思い出すよ・・・

「なつ～」これは！？」

私が驚いたのは剣が素手でつかまれていたことだ・・・白刃どりですか。よほどの目がないと、出来ない筈ですが・・・なんという技術・・・

「とりあえず、士郎の家で話し合へ！お一方それでよいかな？」

「分かりました・・・」「いいだろう。」

そうして、私達は士郎の家に入つたんです。

ふ～それにして何だ？セイバーの剣は見えない筈なのにな・・・いや、見えなかつたんだけどね？なんとなくそこに来るなつて思つて白刃どりの真似したら、出来ちゃつたんだよな・・・まぐれかな・・・？そんな事を考えながら、俺が横になつていると士郎たちが聖杯戦争の話をしていた。さあて、俺は寝るかな・・・確かに、この後はヘラクレスとの戦闘らしいし「ねえ・・・政宗もいくでしょ？」・・・ホワイ？今何と？

「あの～今なんて？」「だから、政宗も教会にいくでしょ？」「何で？」「だつて、政宗つてサー・ヴァントでもないんでしょ？」

「そららしいな・・・」「だつたら、一応説明くらい聞いたほうがいいんじゃない？」「いや、でも俺はい・・・「いいからー行くの！」・・・分かりました。」

そうして、おれは渋々ついていくのであった……はあ、死亡フラグ決定……グッバイ俺

そうして、俺達は教会に着いた。

「さつ行くわよ。」「ああ、遠坂……」「やつぱり、俺はいいよ。」「いいから、くるの！」

俺は逃げようとしたが、凛に捕まってしまい入ることになった。

「ふむ……それで、君は何なのかね？」

「知らん。気付いたらここにいたのだ。」

「くくく。そうか、まさかあの伊達政宗がこんな優男だったとはな……。」

「からかうな……それより早く説明してくれ。」

「よからう。教えてやろう……。」

まあ・・・ぶっちゃけ知ってるからいいんだけど……。そして、俺は適当に言峰の話を聞き流し外に出た……。今頃、士郎達が説明を受けている所だろう……。

「政宗……はなしがあります。」

「ん？お嬢ちゃんか？」「もう、ツツ『//ませんよ……』何だ・・・つまらんな・・・で？何だ？セイバー？」

「单刀直入で聞きます。あなたは英雄なのですか？」

「英雄ねえ……。」

確かに俺は地方では英雄？みたいにされたことはあるようなないような・・・

「英雄ではないかなあ……。戦乱の世に生まれて人を殺して殺して殺して殺して殺しまくった、人殺しだよ・・・・・」

「そうですか・・・・・」

セイバーはもう何も言つて来なかつた。そして、士郎達がやつてきて俺達は帰つた。

「ぐおおおおおおおお！」

「ふふつー！んばんわ。おにいちゃん？」「

そうだった……へラクレスが来るんだった……逃げよ！

「ちょっと、何処に行くの！？政宗あんたも戦いなさいよ！」

「俺をあいつらみたいな戦闘狂と一緒にすんな！俺は、人を動かして闘うことならできるが一人で闘うのは嫌なんだ！」

「いいから……闘つてきなさい！」

「頼む！政宗！セイバーを助けてやつてくれ！」

「セイバーを？」

俺がそういうて、振り向くとセイバーが傷だらけでひざをついていた。本当なら、行きたくない……それが、こいつらにとつても俺にとつてもいい事だ……だけどよお……
「見殺しつてのはちと俺の流儀に反するんでな……助けてやるよ……今回だけだぞ！」

そういうて、俺はセイバーを助けるために走った。

セイバー 視点

「くつ！強い……だが、マスターさえ生きてさえいれば……
「ぐおおおおおおおー！」こままでか……「おおっと、そこまでだ……
・・・えつ？」

私が上をみると、立派な着物と防具を纏つた人がいた……

「まさ……むね……？」

「ぼりぼろだな……あっちに行つてろ……「ちよーっきやああああー！」

私は政宗に思い切り投げられた。

「セイバー！大丈夫か！？」

「私は大丈夫です。士郎、それより政宗が……」

私は政宗を見ると……政宗は腰にさしてゐる剣に手をかけていた……
・・あの構えは？

「ふうー真面目にやるかー行くぞ！「ぐおおおおおおー！」危な

つー？五月雨！

「ぐおおおおおおおお！」

「うそっ！バーサーカーが一撃で！？」

「やったか？」「ぐおおおお！」まだいきてんのかよ！

「ふふふ・・・残念ね。お兄ちゃん、そいつはギリシャの英雄ヘラクレスなのよ！」

「「「「なつ！？」」「」」

あいつらはマジで驚いてる。しかし、俺は

「へ～そなんだ。」

「・・・・・ずいぶん、反応が薄いのね・・・・・

「そりやどつも・・・・・

「褒めてないわよ！やつちやいなさい！バーサーカー！」

「ぐおおおおおおおおおお！」

「来いよ！ギリシャの英雄！歴史好きの俺にしては、興味をそそる

戦いだ！」

俺とヘラクレスは刀と斧剣を交えた・・・・・しかし、あいつには俺の居合いをする暇が無いな・・・・・だつたら！

「はっ！」

「ぐおおおお！」

俺はもう一本の刀を抜いて、一本でヘラクレスの体を切り裂いた。

しかし、なんだ？この刀の名前を俺は知っている？

「妖刀・・・・鬼松・・・・？」「ぐおおおおお！」「――！」「刀叫穿！」

俺は一本で見えないくらいの斬撃を食らわせた・・・・・

「・・・・・仕方ないわね・・・引くわよ・・・バーサーカー！」「ぐ

おお！」「お嬢ちゃんの名前は何ていうんだい？」・・イリヤスフ
ィール・AINZBERNよ・・・それじゃあね・・・おにいちゃん・

・・・

そつして、彼女達は消えていった・・・・俺は安心して刀を納めた・

・・・

「あんた！闘うの苦手なんじゅ無かつたの！？」

「いや・・・俺が闘つとすぐ戦が終わつirmaつからなんだけビ・・・

「化け物ね・・・まあいいわ。衛宮君、私達と同盟を組まない?

もちろん、政宗も。」

「いいぞ。」

「本当にあなたは決断が早いわね・・・考へていろのかいないのか・

・・衛宮君は?」

「まあ・・・政宗が言うなら俺もいいぞ。」

「交渉成立ね・・・それじゃあ、また明日。」

そういうて、凛たちは行つてしまつた。さて、俺も士郎の家に帰る
か・・・・・

「ラクレス登場！？勝てる訳ねえだろーーー（後書き）

ちょっと、オリジナルの話の進め方にならうです。

ライター登場（前書き）

更新頑張ります。

ライダー登場

翌朝・・・俺は痛感した。衛宮家の食卓は戦だと叫う事に・・・。漫画などで知つていたが、これほどとは・・・セイバーもとい、アルトリアが俺が手をつけようとしたおかげを奪いとつてきたので俺も戦を開始した。

「政宗！その卵焼きは私のです！」

「馬鹿野郎！お前は食いすぎだ！見てみろ！俺の分の卵焼きがもうねえじやねえか！？」

「あなたがぼくとしているのが悪いのです！」

「何だとこらーそこを差し引いてもお前の方がくつてんじやねえか！」

「つるさいです！この眼帯！」

「あつ！それ宣戦布告だよな！そりだよな！？」

「望むところです！」

そうして、俺らがそれぞれ刀と剣に手を置いたところに士郎がフライパンをもつて駆け込んできた。

「二人とも！喧嘩はやめてくれ！頼むから！」

「いたしかたななしか・・・」「マスターがいうなら・・・

「やれやれ・・・」

そんなことをしてゐ内に何と、腹黒少女の桜ちゃんとタイガーこと藤村大河が入ってきた。

「先輩！遅れてスイマセン！・・・あれ？誰ですか？・・・その人たち？」

「士郎――おなか減ったよ」

おいおい・・・桜ちゃんから変なオーラが出てるぞ・・・黒化しそうだ。タイガーは食べることにしか興味が無いのね・・・どつかの王様みたいだな・・・何か。失礼なことを考えていませんでしたか？政宗・・・と俺の心を読む王様・・・勘弁してくれ。

「何も・・・思つてねえよ・・・。」

「ですか？それならいいのです。」

「俺が士郎のほうを見ると俺らのこと」を説明しているようだ・・・。
一体どんな説明をしているのだろう？」

「ああ、政宗。セイバー。こっちに来てくれ。」

「む？ここで、セイバーの事を紹介するんだっけか？俺がこの世界に
来たことでバランスが崩れたのか？」

「何だ？（何でしよう？）」

「藤姉。この人達は親父に世話になつた人たちだ。それで、親父に
恩を返したくてこの家にいるんだよ。」

「ふうん。そうなんだ。お名前は？」

「俺の名前は・・・伊達政宗。政宗と呼んでくれ。」「私はセイバ
ーと呼んでください。」

「分かつたわ！政宗くんとセイバーちゃんね！私は藤村大河。よろ
しくね！」

「私は間桐 桜です。よろしくお願ひしますね。政宗さん！セイバ
ーさん！」

「「よろしく。大河。桜。」」

それから、俺たちは飯を食い始めた・・・。

「「行つてきまーす」」

「おう！行つてらつしゃーい。」

俺がそういうとセイバーが士郎と話をしていた・・・おそらく、
学校に行くか行かないかというはなしだろう。・・・俺は寝る
か。

「政宗！」

「うお！？何だ！？」

「ちょっと、話があります。ついてきてくださいー。」

「ああ・・・いいぞ。」

俺はセイバーについてくと、庭の見える部屋に入った。何だ？何か

俺悪いことをしたか？そんなことを俺が考えていると……

「政宗……あなたは私の敵なのですか……？」

「ああ？」

「政宗は私の敵かと聞いているのです……」

「お前はどうちがいいんだ？「えつ？」俺に敵になつて欲しいのか？まあ……俺は別にそれでいいぜ？殺す覚悟はあるよ？俺は……」

「私は……出来ればあなたと戦いたくない……」「何故？」

「あなたと食事をしていったあの時……私は楽しかつたです。だから……鬭いたくない……」「

「そうか……なら鬭わないよ……」「……本当ですか？」ああ……お前……裏切られたことがあるんだろ？「つつつつ！」大丈夫……俺が生きていた時代のなんてそんな事日常茶飯事だつたからな……」「

「過酷な人生だつたんですね……」「ああ……だから俺がお前の友達になつてやる。」「えつ？」

「俺は友達は裏切らないぜ？だから、元気出せよ……」「

「政宗……ありがとう。」

「さあ……お前のマスターがピンチだぞ？」「

「えつ！？本当だ！？今行きます！マスター！」

そうして、セイバーは行つてしまつた。さて、俺もメデューサの顔とワカメの顔を拝みに行きますかね……俺はセイバーの後を追いかけた。

士郎視点

俺は結界の起点を見つけたまではいいんだがライダーに襲われてしまつた。しかも、ライダーの鎧のついた釘のような武器が俺に刺さつている。

「ぐう！」

「ふふ……逃がしませんよ？」

「ぐう・・・こんな物！ぐうううう！」

「ふふつ・・・勇敢なのですね。ですが、これで最後です！」

「うわあああ！「ガキン！」えつ？」

「マスター！大丈夫ですか！？」

「セイバー・・・・・？」

そこには、金色の髪に鎧をきた剣士が立っていた。

「ふう何とか間に合つたか・・・・・」

俺はセイバーの後に続いて降りた。見るとそこには桃色の髪の女が立っていた。

「セイバー・・・」いつは俺がやる・・・・・士郎をつれて離れていろ・・・・・

「分かりました・・・・・護武運を！」

そういうて、セイバーはすこし離れた。そう、ちょうど俺の声が聞こえないくらいに・・・・・

「あなたは誰ですか？」

「俺か？俺は伊達政宗・・・日本人なら誰もが知っていると俺は思つてている。」

「英雄ですか？」

「残念・・・英雄ではないな・・・・・ただの人殺しだよ・・・・・」

「そうですか・・・あなたには強力な魔力がありますね・・・「何だと？」気付いてなかつたのですか？まあ・・いいでしょ。その魔力・・・・・もらいます！」

ライダーは俺に釘を投げてきた・・・そして、俺はその釘をつかんだ・・・・・

「なっ！？」

「馬鹿だなあ・・・丸見えだぞ？メデューサ？」

「なつ何故私の真名を！？「その話はいい・・・とりあえず・・・消えろ！」！！」

俺は懐の一丁拳銃に手をかけた・・・名前なんだつけ？まあ・・・・

適当に阿修羅でいいか・・・

「おひあ！」「なつ！？」足に当たったか？・・・まあいい・・・わざとに行け・・・「えつ？」お前をじぶす氣はなこよ・・・お前なら斤足でもいけるだろ？」「

「・・・・・・・・」

何も言わずライダーはお辞儀だけしていつてしまつた。さて・・・問題は・・・突然矢が飛んできた・・・来たよ・・・面倒ごとが・・・

「貴様は何者だ・・・・・？」

「は～面倒くせ・・・・「何者だと聞いてるー」・・・・転生者を・・・」

「転生者だと・・・・？」

「ああ・・・そのことに關しては後でゆづく話してやる・・・今はそんな事を言つている場合じゃないだろ？」「

「何を・・・・「アーチャー！何やつてんのよー？」・・・・ビツヤうその様だ・・・」

アーチャーはとても残念そうな顔をして凛の元に向かつていった・・・俺もいくか・・・そうして俺は士郎の家に向かつた。

ライター登場（後書き）

次回は戦闘するか分かりません。
次回もお楽しみに。

俺の朝はヤバイ・・・・（前書き）

いつも。武士道です。
更新頑張ります。

俺の朝はヤバイ……

一時休戦といった俺とアーチャーは一度別れて士郎の家で待ち合わせをした……そして、士郎の家にて……

「政宗……」

「ん? 何だ? セイバー?」

「政宗はその……王だったのですか?」

「王? 俺が? はははは! 「何故笑うのです! ?」まあ……確かに俺は奥州の竜とも呼ばれたこともあるし、独眼竜という異名もあつたな……結果的に言えば、俺は地方の領主様つてことだ……お前らで言つな?」

「あなたほどの男が地方の領主ですか……あなたが私の部下だつたら良い國を作れたでしようね……」

「……流石はアーサー王……考へることが違うな……」「!! 何故私の真名を! ?」それは秘密だよ……」

「……まあいいでしょ。政宗はサーヴァントではないのですし……なにより、友達なのですからね……」

「ありがとうよ……おつ? 飯が出来たようだな? 「政宗は鼻がいいのですね? 「まあな? それじゃ! お先に! 」

「あつ! ズるいですよ! 政宗! ?」

俺は飯に向かつてダツシユした! 台所に行くと士郎と桜ちゃんが飯を運んでいた……そういうえば……確か桜ちゃんには蟲がいるんだつけ? ……かわいそことに。だが、俺には何も出来ない。許しておくれ……そう考えながら俺は席に着くとピンポン! とインター ホンがなつた。……来たか。ダブルサンタ……

「それより、士郎? 「何だ政宗? 「何で俺の隣にセイバーなんだ? 戰争が始まるぞ?」

「しつ仕方ないだろ? セイバーがそこがいいつて言つんだから? 「何? 「

俺がセイバーを見るとセイバーが顔を赤らめていた……はあ。面倒なことになりそうだ。

そんな事を思つていろいろうちに士郎が困った顔をしながら、凛たちを連れてきた。

「今日からここに居候させてもらひうわよ？ よろしくね？」

「ああどうぞ？」 「それがマスターの意思なら」

「ありがと。私おなかすいちゃつた。」 飯にしましょ？

「ああそうするか？ それでは、みなさん手を合わせて」「…………頂きます！」 「…………」

あれ？ 俺何時から号令係になつたの……？ しまつた！ こんなことを考へている場合じやない！

「隙ありです！ 政宗！」

「俺の焼肉がああああーくそつーならばおれはヒラメを頂く！」

「くっ！ 私のヒラメが…………やりますね。政宗…………」

「そりやどうも…………」

箸を右手に茶碗を左手ににらみ合つ一人…………戦は始まつたばかりだ！

凛視点

この人……本当にバーサーカーを倒したあの人なのかしら？ まるで、セイバーのお兄さんのようじやない。でも……楽しそうな人ね……

「ねえ……士郎？」

「なつなんだ？ 遠坂？」

「いつつもある二人つてああなの？」

「ああ……いつつもある調子だよ……」

「へえ……」

何か憎めない人ね……はつ！ いけない！ いけない！ この人はいつかは敵になるかもしれないのよ。でも……こんな優しい人があの奥州を統一した伊達政宗なんて信じられないわ……私はそ

う思いながら茶をすすつた。

その夜・・・・

「いい夜だな？アーチャー？」

「気付いていたのか・・・・・」

「気付くに決まつてんだろ？なんとなく気配を感じるからな・・・・

「気配は完全に断つたと思うのだが・・・・化け物かね君は・・・・

「化け物か・・・・とこりでの話をしにきたのだろう？」

「ああ・・・・・そうだ。君が何者かをだ・・・・・」

「簡単に言つと俺はこの世界の住人ではない。「何だと！？」大きい声を出すな・・・・俺の予測だとこの世界は平行世界だ・・・・お前が知つている世界ではないだろ？」

「平行世界・・・・やはりな。それで、転生者といつていたな？どういうことだ？」

「どういづいとつて、異世界からの住人つて事だ・・・まあ俺らの世界はお前らが言つ神様の世界とこうことになるかな？」

「何だと！？」

「だから、大きい声をだすなつての。まあおれはそこで死んだんだ。そしたら、気付いたら伊達政宗に憑依してた・・・・そして、武将としても死んだ俺はここについた・・・・つてことだ。」

「成る程・・・・貴様が別世界から来たことは分かった・・・・それで？貴様の目的は何だ？」

「目的ねえ・・・・強いて言つならハッピーエンドかな？「ハッピー エンドだと？」そうだ。俺は大体のことならこの聖杯戦争の行く末やこれからお前らがどうなるかが分かる。」

「ほう？それで？」

「救つてやりたいんだ・・・・あの娘を・・・・士郎をな・・・・そして、AINツベルンも・・・・出来るなら桜もだが・・・・・」

「救いか・・・・・言つておくが・・・・この世界の士郎を殺しても

「無駄だと思つぞ？」・・・何故だ？」

「歴史の修正力つてやつさ・・・俺も日本の歴史を変えよつとしたことがある。」・・・結果は？」失敗だよ・・・結局歴史通り奥州統一で終わつちました・・・」

「そりか・・・分かつた。だが、約束してくれ・・・」何をだ

？」必ずこの世界の俺たちを幸せにしてくれると・・・」

「分かつた・・・約束しよう。」

「助かる・・・それではな・・・明日酒でも飲もう・・・」

そういうつてアーチャーは行つてしまつた・・・あいつ、あんな奴だつけか？俺は眠い目をこすりながら布団に入った。

翌日・・・セイバー視点

「政宗！起きてください！朝ですよ！」

「頼む・・・あと一分いや・・・後2分」

「駄目です！」ヌヌヌヌ・・・くそ。このままでは・・・はっ！ そうだ！・・・いいんですか？政宗？あなたの朝ご飯はありませんよ？」

そういうと政宗は私の手をつかんで・・・

「それだけは許さん・・・」

そういうつて、ふらついた足でトイレに行きました・・・。もう・・・

・・・食いしん坊ですねえ。政宗は・・・
俺はトイレについて朝の一発を出していた・・・すると、遠坂が寝ぼけているのか普通に俺のところに入つてきた・・・マジかよ
（朝からテンション下がるわ・・・死亡フラグ立ちましたね・・・
こりや。

「ふあ～眠い～トイレトイレと・・・きやああああああ～！」

「それ！俺の台詞うううううう！」

俺の朝は平和という言葉は存在しないよつだ・・・

俺の朝はヤバイ・・・（後書き）

次回はライダー戦です。
お楽しみに！

主人公の説明（前書き）

どうも。武士道です。

ちょっと、主人公が分かりにくいくらいと思うので説明入れときます。

主人公の説明

主人公 伊達政宗／転生者

一度死んで、氣付くと戦国武将の伊達政宗に憑依していた・・・
一度、天下を狙うがあえなく失敗し、結局歴史どおり奥州統一のみ
となつた。やがて徳川の世になつて病死した、享年70／満68歳
。そして、目が覚めると自分は全盛期の20代の頃に若返つており
異世界にやつってきた。

武器

ひやつきもねちか

百鬼宗近 政宗の愛刀だったもの。

阿修羅 戦国無双の伊達政宗の一丁拳銃。名前は思いつきで付け
たもの。

おにまつ 鬼松 目が覚めると持つていた、謎の妖刀。

人物背景

基本は面倒くさがり。しかし、仲間のためなら己の身を削つてでも
助けに行くという結構優しい人物。楽しいことが大好きで無粋なこ
とをするやつが嫌い。

日課は刀を研ぐことと、朝からの一発／＼自由に解釈してください。
／＼。好きな食べ物はラーメン。

趣味は読書や釣りです。

楽しみなことは、日本茶を飲みながら平和を謳歌すること。しかし、
最近はセイバーに邪魔をされている。

容姿は戦国バサラの伊達政宗。／＼転生したら変わっていた・・・

能力？（注）今の所作者が考へている能力です。

筋力増加A

幸運D

気配遮断C

翻弄B「相手を幻覚やスピードで惑わすスキル」

俊足C+

騎乗C

探知A「半径300メートルなら気配を消してもいなくても場所が分かるスキル」

宝具? ?（注）今の所作者が考へている宝具です。

鬼松 怪しげな妖氣?を出して、あらゆるもの切り裂く。なお、斬れば斬るほど切れ味があがる。かなり高くなると宝具も切れる（ランクBまで）。鞘にしまうと切れ味は元に戻る。

百鬼宗近 強力な斬撃を飛ばして攻撃する。

阿修羅 無数の弾丸の雨を相手に浴びせる。一発の威力はランクB程度です。

療養武妖「りょうようぶよう」対象の傷や病・・・本人が危険と定めたものを治す事が出来る。しかし、本人が死んでしまうと今まで治したもののが戻ってしまう。

こんな所です。『B』作者

ちなみに主人公はまだ自分にこんな能力や宝具があるのは気が付いていません。その所『了承ください』。

主人公の説明（後書き）

飛竜昇天については、詠唱の言葉を募集します。
自分でも考えますが、よろしくお願ひします。
それでは、文章が下手くそですが。次回もお楽しみに。

俺に宝具！？ライダー再び！（前書き）

いつも、武士道です。

下手くそな文章ですが、よろしくお願いします。

俺に宝具！？ライダー再び！

「くそ、凛め……遠慮なく叩いて来やがって……」「あれから、遠坂に何故かタコ殴りにされ飯を食いに行つたところ既にほとんどのおかずは消えていた……。そう、セイバーの手によつて……」

「…………俺のおかずが……」

「残念でしたね……政宗？既におかずは私の異の中です。」

「昼食のとき覚えてるよ……？」「ふふ……楽しみにしています。」

「畜生。」

俺はちょっと残念な顔をしながら、飯をとつた。すると、士郎が……

「なあ？政宗？」「何だ？」政宗は知つてているのか？「何を？」学校に張つている結界の事だ。

「ああ……あれか。「知つてたのか！？」ああ知つてたよ。」

「何でそのまま見ているんだ！？」

「何でつて俺がいつてどうする？「何だと？」仮に俺が行つたとしようづ……だが俺には結界を壊す力はない。そんな奴が行つてどうする？」

「ぐう……」

「士郎……お前の気持ちも分かる……人を救いたい気持ちも……だがな？人には出来る事と出来ない事がある。そこを見極めないかぎり、お前は本当の意味で人を救えない……」

「…………」

士郎はそれから何も言わなかつた。セイバーたちもまるで、何かを学んだかのようだつた。それから、俺達は士郎達を見送り茶をすすつていた。

「…………政宗。」

「…………何だ？」

「士郎達は大丈夫でしょうか・・・?」

「大丈夫だろ？何か異常があつたら、俺が気付くし……」

「それで、おまえの仕事ですか？」
「何だか？」

「はあ・・・・?」

卷之三

「たから 稽古ですよ！稽古！」

卷之三

カトウ・アーティスト・アーカイブ

セハノ異常ナハ無ニ

「それで行きます

おおらい

俺は道場に入りセイバーと稽古を開始した。それから、小一時間稽古をした。

古をした
震成つ二分

はあ・・・・腹洞ハラノカたな・・・・

「そうですね………せえ………せえ………ん?どうした?」流

石は・・・武士でしょうか・・・強いですね?政宗?」

「ああ・・・・伊達に戦国生きてねえぞ?それより、飯にしよう。

「そうですねーー。」飯にしましょーー。」

俺らは士郎が作つておいてくれた飯を食べに行くために居間に向か

つた。

「それじゃあ・・・・・いただかねや。」

「 い た だ き ま す 。

俺らがそういうて箸に手をつけた瞬間・・・・・とんでもない力を

学校から感じた。

「…………」「どうしたのですか？政宗？」「…………学校の結界が発動

十一

「…………隨分間が悪いのですね…………」「同感だ…………」
「行きましょうか？」

「ああ……ちひかう……」

「アーティストの心」

俺らはさくは田畠を歩いて、次に生木に向かうが、走っている途

中には俺は…・・・・・「カツめ…・・・半殺し決定だな…・・・」と

ぶやいた。

「政宗……？」「ああ気にしないでくれ」そうですか？早く行きましょう！マスターが心配です。」

「ああ……そうだな。」

俺らは鬼のようなオーラを出しながら学校へ向かつた……。

ワカメ視点

「ははは！人がばたばた倒れていくぞ！？」「慎一い！」ん？衛宮じやないか？ちょうどいいや・・・ライダー手を出すなよ？「分かりました」死ね！衛宮！」「

僕は士郎に向かつて疑臣の書で攻撃をした・・・だが、士郎がもつていた木刀によつて防がれてしまつた・・・

「ただの木刀に防がれだと！？何をした！衛宮！」「

「俺も実は魔術が使えるんだよ・・・」「何だと・・・？」まあ・

強化つていう地味な魔術だけどな？」「

「ふつふざけるなああ！何でお前が魔術が使えるんだ！？偶然魔術回路が発現したひよっこくせに！殺してやる・・・殺してやる！」「

僕は士郎に向かつて疑臣の書で攻撃をした・・・しかし、その一撃はいきなりでてきた男によつて止められてしまつた。

「！」の・・・くそワカメ・・・「なつなんだよ！？お前！？」俺の昼飯の邪魔をしやがつて・・・

俺は偉そうにしているワカメを殴りに走つた・・・

「うわあ！くるな！来るなあああ！」

「何だ？そのへっぽこ魔術は？」

俺はワカメが出してくる魔術？を片手で弾いた・・・そうして、

ワカメに殴ろうとした所ライダーに邪魔をされた・・・

「ライダーか・・・」「

「久しぶりですね・・・」「

「よくそんなのをマスターにしているな?」

「…………「それが…………あの娘の指示か?」――あなたは何故それを……?」

「そんなことはどうでもいい……逃げるか?」

「ああ……?どうでしょうね!?」

「……おっと。」

ライダーの武器をかわした俺…………そして、凛たちがやつてきてアーチャーが攻撃を仕掛けたそろそろ危ないな…………お?ライダーが目隠しをとったな…………来るか?

「――これは…………「魔眼よ!しかも強力な!」

あいつらは魔眼に苦戦しているようだな…………さて、そろそろ…………お?来たか……俺が見るとライダーの前に血の魔方陣が出来上がっていた…………

「士郎!危ない!」

セイバーやアーチャーがマスターをかばう…………その前に俺は走つた…………。

「政宗!?何を…………」

「黙つてみてろ!…………行くぞ!阿修羅!」

俺は阿修羅に手をかけた…………すると、どうつかえбаいいか頭に流れ込んできた…………成る程これが設定という奴か…………これが、宝具とはな…………俺はそう思しながら阿修羅で弾幕を作り上げた…………

・

「阿修羅…………千剣弾雨へせんけんだんう!――」

「これは…………!――」

俺の宝具とライダーの宝具がぶつかつた…………どうやら、相殺しあつたようだ…………しかし、ライダーの姿はもう無かった…………士郎達は何かを話しかけているようだ…………そして、一手に分かれた…………

「政宗…………何だ?」俺は慎一を助けに行く…………

「そうか…………行つて來い。「えつ?」何だ?俺が止めると思つ

たのか？お前が決めた道なら俺は止める

「ありがとう・・・政宗・・・それじゃあ行こうか？」

「・・・待て俺も行くのか・・・？」

「当たり前でしょう？私たちは友達なのでしょう？」

「友達関係なくね？」

俺はそんな事を考えながらもセイバーたちについていくのであった。

俺に宝具！？ライダー再び！（後書き）

次回でライダー戦は終了です。
オリジナルの話の展開になります。
その所をご了承ください。

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・（前書き）

「んにちは。武士道です。
更新頑張ります。

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・

「はあ～何で俺まで・・・・「文句許しませんよ?」・・・はあ。

「俺は今、何故か士郎達と共にライダー達を探している・・・ぶつ
ちゃけ、俺の探知を使えば1発なんだが・・・これ集中して探すと
結構疲れるんだよな・・・それに、これは士郎達がやらねえと意味
ないし。そこで、俺は士郎達にある提案をした。

「一手に分かれよう」「はつ?」「・・・だから、一手に分かれて探
すんだよ!」

「まあ・・・確かにそうだな・・・」

「政宗?」「何だよ?」あなたの探知能力を使えばよいのでは?

「・・・・・あれ、疲れるからヤダ・・・「ヤダってあなたは子供で
すか!?」
「つむせえ!あれ、集中すると結構神経削るんだぞ!?」
「・・・・・分かりました。では、士郎と私はこちらを・・・政宗は
あっちを頼みます。」

「おう!分かつた!見つけたら銃を空に向けて撃つからよ

「分かりました。それではご武運を・・・」

そういうて、セイバーたちは行つてしまつた・・・さて、俺も探
すとしますか!

セイバー士郎視点

「まったく・・・政宗は・・・本当に面倒くさがりなのですから・・・

「まあまあ・・・セイバーも落ち着いてくれよ?政宗も何か作戦が
あるからあんな事を行つたんだと思うぞ?」
「士郎はそう思いますか・・・?」
「・・・・・ありえないな。」

「……………」

しばらくの沈黙……………

「……………とりあえずライダーを探そうか？」

「そつそつですね！さあ一士郎行きましょう！」

「おっおっ……………」

二人はライダーを探しに走った……………

「……………そういうえば、あいつらが見つけたときどうやって俺に知らせるんだ？」

俺は途中にブックオーディオで買い物をしたついでに、そんな事を考えていたら夜になっていた……………

「…………もうすっかり夜じゃん！…………良い子は寝る時間だぞ？まったく…………」

そんな事を愚痴りながら俺が夜の街を歩いていると…………でかいビルに着いた。

「あれ…………このビルってもしかして…………」「ガキン！」
・・やつぱりかよ。」

そう…………このビルはFATEの漫画でライダーとセイバーが戦つた…………あのビルだ…………俺はなるべく関わりたくないでの、一般人のフリをして通り過ぎ去ろうとしたところ…………

「ドゴォン！」

「…………ごふつ！何故…………」「うなる…………？」

そう…………何故か逃げようとした所、空からセイバーが落ちてきたのだ…………俺が何をした？

「だつ大丈夫ですか！？つて政宗！一体今まで何をしていたのです！？」

「探してたんだよ！ライダーの事を！」

「それでは何なのです？…………その袋？」

・・・・・マズイ。非常にマズイ。今まで、ブックオーディオに行つてたなんていえない…………ばれてはいけない…………

「そつそんな事よりライダーが行つちまつたぞ！」

「えつ！？」

ちょうど、ライダーが走つて屋上に向かつていつた・・・・・ナイ

スだ！ライダー！

「くつ！早く追いますよ！？政宗！」「まあ・・・待て。」えつ！？

ちょ！？

「行つてこいやあああ！」

「きやああああああ！」

俺はセイバーを力いっぽい投げた・・・・・おー屋上まで届いち
まつた。すごいな・・・今俺の腕力・・・俺は飛んでいくセイ
バーを見ながら一人で納得するのであつた・・・・

セイバー 視点

「きやああああああ！あつ・・・・・士郎。」

私が政宗に投げ飛ばされて屋上につくと、ライダーが宝具を出そう
としていた・・・

「セイバー！？」

「士郎！くつ・・・・・」

ライダーの放つ光は空に向かつてそして・・・

「まさか・・・ペガサス！？あのが宝具なのか！？」

「士郎！あれば恐らくライダーとしての彼女の能力の具現です！宝
具は別にある筈です！」

「ふふふ・・・流石はセイバーそのとおりです。見せてあげましょ
う！我が宝具・・・ベルレフオーン！」

！！！物凄い圧力・・・先程の攻撃とはぜんぜん違う！こうなつ
たら、私も宝具を・・・

「いけつ！セイバー！何を言うのですか！？士郎！」「これ以上
俺を庇う必要はない！お前はライダーを倒す事だけを考えろ！」

・・・・士郎。あなたという人は何処まで・・・でも、そんなあ
なだから私は・・

「いいえ。士郎。あなたがその身を犠牲にする必要はありません。「なつ何だ！？」この風は？」私の全身全靈を持つて必ずライダーを倒します！」

「猛ろ！天馬よ！天上の神々に愛された美しきわが子よ！その大いなる力を持つて眼前の敵を討ち滅ぼすのです！」

ライダーはすごい勢いで突っ込んでくる・・・・・

「ライダーよ。貴女の宝具に私も宝具で應えましょう！私はこの一閃で進むべき道を切り開く！ゆくぞ！エクスカリバー！」

私の剣から、黄金の光が飛び出してライダーに向かった。

「何！？「おおおおおおー」まさか・・・・この子が敗れるとは・・・

・！」「

そして、ライダーは消えた・・・・

「うわ～・・・・セイバーめ・・・・エクスカリバー撃ちやがったな？」

俺は空を見上げて呟く・・・・すると・・・空から・・・何か落ちてきた・・・ん？何だ？ありや？瞬間嫌な感じがしたので逃げようとする俺・・・しかし、逃げられなかつた。

「ドゴォン！」

「『』はつ！・・・・こんな事もあつたよつな・・・たく・・誰だ？つてライダーかよ！」

俺の背中にはライダーが乗っていた・・・・あれ？待てよ・・・確か漫画では・・・ライダーが慎一を助けるんじゃなかつたか？やはり、俺がいるせいで時間軸が狂つたのか？

「おつといけねえ・・・・それより、こいつをどうするかだな・・・ん？」

俺が困つていると頭の中に情報が流れ込んできた・・・・療養武妖

？まあいい・・・・使わせてもらおうか！

「・・・行くぞ。療養武妖・・・・」

俺がそう言つて手を当てるとライダーの傷が治つた・・・早いな・・

・予想外だぞ。これほど早いとは……俺はとりあえずライダーを背負つたまま空を見るときよひび、ワカメが落ちてきたのでついでに助けた……

「ワカメも気絶しているのか……まあいいか「政宗さん?」……

桜ちゃんか」

俺が一人を介抱していると桜ちゃんがやつてきた。

「これはどうこう」となんです?」

「……桜ちゃん? 「何です?」蟲……取つてあげようか?」

「……本当にですか!? 「ああ……出来ると思ひます。」 ……よ

かつた。」

俺は桜ちゃんにも療養武妖をかけた……ちなみにこの療養武妖、本人が危険と定めたものを治す力である。

「……嘘。本当に治つた……? 「はい……おしまい。」 あり

がとう!」ぞこます!」

「いいんだよ。それより、桜ちゃん? 「はい?」 聖杯戦争の事何だけど……」

「……やつぱり知つているんですね。 「ああ知つていてよ。そこで、同盟を組まないかい?」 同盟?」

「そう……俺達と同盟を……「はつはいー喜んでー」 ゆつゆつありがとう。」

「あの……政宗さん? 「ん? 何だ?」 本当にありがとうございました。」

「いいよ。お礼なんて。とりあえず、俺は慎一を病院に届けるから桜ちゃんはライダーが起きたら士郎の家に行つてくれ」

「分かりました。」

そうして、俺は桜ちゃんと別れてワカメを病院に投げて……士郎の家に向かつた。む? そいえば……アーチャーとの約束は……まあいいか。士郎の家に行けばあいつも着ているだろう……

・俺はそう願いつつ士郎の家へと急いだ……

ライダー戦決着・・・俺桜を救えました・・・（後書き）

次回はアーチャーとの酒飲み会話です。
ギャグは苦手だけど更新頑張ります。
それと、長い線が書けなくてすいません。
エクスカリバーの所がかっこ悪くなつてしましました・・・

楽しい帰り道・・・？（前書き）

いつも、武士道です。

更新頑張ります。

（注）主人公はバザットの事はつる覚えです。それと、時間軸が狂っているのでそこの所を踏まえてご覧ください・・・

楽しい帰り道・・・？

俺は帰る途中、見覚えのある教会を見かけた。俺はちょっと興味本位で見ると・・・・ピンクの髪をしてスーツを着た女の人がいた。

しかも、腕から血を流してゐる

「！おい！大丈夫か？あんた！？」

「うう・・・」

「・・・あれ？こいつどこかで見た事があるな？それにしても、
・・・マズイな。かなりの出血量だ・・・放つておいたら死ぬだ
うう。」

「せめて元の腕があれば、再生は簡単なんだが・・・おっ？」

俺が足元を見ると・・・この女性の腕と思われるものが落ちていた。

・・ラツキー。

「よしつーこれなら・・・」

俺は早速、療養武妖を開始した・・・すると、女性の腕はすぐにく
つついた。俺は女性に向かつて声をかけた。

「おいっ！あんた！」

「・・・・・・」

「意識は無いか・・・仕方ない、士郎の家に運ぶか。」

俺は女性をおんぶして、足に力を入れたその時

「おい！てめえ！」

「ん？ランサーか？」

「お前、俺の事を知つてんのか？」

「ん？ああちょっと、お前の知り合いに教えてもらつたんだよ」

「！・・・てめえ・・・聖杯戦争の関係者か？」

「そなだが？それで、お前の用事は何だ？ランサー」

「そいつを置いて、とつとと失せろ！」

「これは、意外だな・・・てっきり、俺と闘いたいと言つたかと思つ

たが・・・

「確かに、闘いてえが・・・今はそいつの方が重要でね・・・
・・・俺はランサーを誤解していたようだ。ただの戦闘狂かと思
つたが、意外に優しいとこあるじゃないか。

「無理だな」

「ならば・・・」

ランサーは槍を構えて、臨戦態勢をとった。

「なら聞くが、お前にこの人を救えるのか?」

「ぐつ・・・」

「安心しろ・・・助けてやる。」

「・・・いいだろ。だが、そいつに手を出したら・・・「しねえよ。
「少しば手を出せよ!男だろが!?」

「はあ?お前どっちなんだよ?手を出すなって言つたり、手を出せ
と言つたり、俺にはお前が良く分からん・・・

「・・・もういい。さつさと行け」

「おう!それじゃあな

と俺が足に力を入れたとこり・・・・・・

「おい。「何だ」約束しろ。」

「何をだ?「俺と勝負してくれよ。お前中々強そうだしな」・・・
はあ~分かつた。」

「それじゃあな

ランサーは言いたい事だけ言つて、どこかに行つてしまつた。あの
野郎・・・・・つとその前に急がなねえとな・・・俺は速度を上げ
て士郎の家に向かつた。

士郎視点

「それにしても、士郎?「何だ?セイバー」政宗は何処に行つたの
でしょうね?」

「そうだな・・・しかしほり、「何ですか?」俺はそれより、気
になつてゐることがある

「それは？」「何で桜が家にいるんだ！？」「ああそれは、政宗に呼ばれたらしいですよ？」

「政宗に？桜、どういふことだ？」

「はい、実は・・・」

それから、桜の話を聞くと驚く事がたくさんあつたが・・・何より驚いたのは桜がマスターだったという事だ。それを聞いて、ライダーがいる事を知ったセイバーが襲いそうになつたので、それを止めるのにも苦労した・・・政宗！早く帰つてくれ！

『ガラ・・・』

！政宗！？俺が玄関に迎えに行くと知らない女人をおんぶしている、政宗がいてそれを凝視しているセイバーと桜がいた・・・

「ただいま。うわっ！？」

俺が帰つてくると、セイバーと桜にすごい視線で見られた・・・俺が何かしたのか？

「政宗（政宗さん？）」「

「なつ何だ？」

「「そのおんぶしている女性は誰なのですか？（誰なんですか？）」「何故かセイバーたちから、黒いオーラが見える・・・士郎に俺が助けを求める」と、士郎は既にいなかつた。

裏切り者おおおおお！と嘆く俺を無視して、セイバーたちは俺に強烈な拳を放つてきた。

「ほお・・・それで、その女性を助けたと・・・

「嘘は良くないでよ？政宗さん？」

「嘘じやないって！本気だから！信じてくれよ！？」

俺がそれでも説得をすると、一人も何とか信じてくれた・・・

俺つてそんなに信用ねえかな？と考えているうちに士郎が

「それで政宗、その人どうするんだ？」

「どうするつて・・・俺が看病するよ。」

「そりが、分かつた。空いてる部屋があるからそこを使つてくれ

「ありがとよ。士郎」

俺が士郎に礼を言つて、部屋に運ぼうとしたその時、

「政宗さん? なつ何だ? 話は何時するんですか?」

「こいつを寝かせたらすぐ来るよ

「分かりました」

俺が桜との会話を終え、部屋に女性を置くと声が聞こえた

「政宗え・・・・・酒は?」

「・・・・・」

俺はその声を無視して、士郎達のこる部屋へ急いだ。

「すまん・・・待つたか?」

「まつたく」

「全然」

何故かセイバーたちの反応がきつい・・・何故だ?

「何でそんなに怒つてんだよ?」

「怒つてなどいません! (ないです!)」

・・・怒つてんじやん。俺はそう想ひこつゝ士郎に、

「なあ・・・・何だ?」何であいつらあんなに怒つてんの?.

「俺にも分からぬよ・・・」

「俺、マジでこええんだけ?」

「・・・頑張つてくれ」

「俺を見捨てるなよ! なあ!」「政宗ー(さんー)」「まつぱー! .

?」

「何で帰つてくるのに十分もかかるのですか?」

「私もそれが気になつていきました・・・」

すごいオーラをだしてくる二人・・・泣いていい?

「ただ、部屋に寝かせただけだが?」

「・・・・・・」

二人は変な目で俺を見てくる・・・

「何だよ?」

「何だよ?」

「まさか・・・あの人に変な事を・・・？」

「！－！そつそれは、政宗！本当にですか！？」

「・・・政宗。」

どうやら、俺はとんでもない勘違いをされていいるらしい。

それにして、土郎のが一番効いた・・・俺のHPは既に限界だぞ？

「「どうなんですか？政宗？（さん？）」」

「そんな事する訳ないだろ！？それより、早く話をさせてくれ！」

俺はこの後、またまたセイバー達に殴られた・・・何もしてないのに。」

その頃の土郎の家の屋根では・・・アーチャー視点

「せっかく酒も持ってきたと言うのに・・・凛にもやつとで許してもらえてきたのに・・・なにをしているのだ！あいつは！！」

私が居間を覗くと・・・何故かセイバー達にリンチを受けている政宗がいた。

「・・・すまない。政宗、私が悪かつた・・・酒を飲むのは明日にしよう。その方が君にとつても幸せだ・・・」

途中、政宗が私のほうを見ながら助けを求めていたが私はそれを無視して凛の元へ帰った。

楽しい帰り道・・・？（後書き）

すいません。酒飲み会話延期にしてしまって、次回は必ずやります。
主人公はバゼットの事を忘れている設定です。
主人公の固有結界の詩？を募集中です！
ご協力お願いします。

俺は今、平和がほしい！！（前書き）

「こんにちは、武士道です。
主人公の固有結界どこで使うか迷つてます。
それでは、始まります。」

俺は今、平和がほしい！！

『政宗・・・覚悟してください？』

『政宗さん？歯を食いしばってくださいね？』

『待て！セイバー！桜ちゃん！誤解だ！俺はあの人に変な事なんて・・・つていうか桜ちゃん？その手に持っているのは何かな？』

桜ちゃんの手にあるものは、鉄球である・・・しかも、棘のついた。

どこかのRPGに出てきたような武器である。

こんなんで殴られたら・・・俺は殴られたときの事を思つどうとしました。

『政宗・・・すまない。』

士郎は俺を見捨てた、ああ神よ・・・呪います。

『政宗ええええええ！』

『政宗さあああん！？』

『やつやめてえええええ！』

俺は盛大に一人の攻撃を口に喰らった・・・

『一体、俺が何をした・・・ぐふつー。』

俺は、視界が真っ赤に染まつた・・・俺は意識を失つた。

「はつ！・・・夢か。」

「おお政宗起きたか？心配したんだぞ？あの後起きないから」

「あの後つて、あれは現実だったのか……」

士郎の話だと俺は昨日の夜、セイバー達にひょこりなれてそのまま氣絶してしまったらしい。

桜ちゃんはライダーが田を覚ますと家に帰ってしまったようだ。俺が寝かせた女性はと言つて、まだ田が覚めていないらしい。

「そうか、まだ田が覚めていないのか。」

「ああまだ眠つているよ」

「ん？ そういうえば士郎？ 飯はまだか？」

「ああもうすぐ出来るよ」

「そうか、じゃあ俺はいつもの一発を出してくるわ」

「お前、その一発つて言ひ方やめるよな

「悪いな、これはくせでね。」

俺はそろそろ新聞を持って、トイレに向かった。

「ふんふんふーん。『ガラー！』…………何でだ」

「まつ政宗！？ なつ何をしてているのです！ はつ早く閉めて」

「お前が鍵を閉めてないのがいけねえんだろ？」

「そう・・・あの時あんな事を言わなければ・・・
俺は戦わなくてすんだんだ！」

「うわあああああ！」

「おっ落ち着け！ セイバー！？」

「死ねえええ！」

「ぎゃあああああ！」

俺は、飛んでくるエクスカリバーをかわし居間へ急いだ。

「おお政宗。朝御飯は出来てるぞ？」

「ありがとう！土郎！」

俺は速攻で朝飯を食べ、そして

「土郎……」「何だ？」後は頼む！」

「ちよつちよつと待て！どういうことだ！？」

俺はそういう残して外へ逃げた。

土郎視点

まったく、政宗の奴なんだつたんだ？

朝飯も速攻で食べて行つたし、何かあつたのか？

俺は食器を片付けていると

「土郎……」「なつ何だ？セイバー？」政宗を知りませんか？」

体から赤いオーラが出ているセイバーがいた……政宗、一体お前何したんだ？

だが、政宗の事だ……おそらく不可抗力だろう。

「政宗？さあ知らないなあ……？」

「土郎……」「はい！」嘘は良くないですよ？」

「分かりました……」

俺はセイバーが怖すぎて正直に喋ってしまった。

・・・・・すまん。政宗

「ん？ 今なんか、変な感じが」

俺は今、寺に入る石の階段を上っている。

寺に入つて座禅でも組もうと思つたからである。

それに、セイバーが怖すぎて家に帰れない。

俺が、そう思いながら階段を上つていると

「そこを行くのはサー・ヴァントか……？」ついで、我と手合わせてみんか？」

「はあ？」

俺が声のするほうを見ると、そこには着物を来た伝説の侍が立っていた。

俺は今、平和がほしい！！（後書き）

次回はキャスター戦とアサシン戦です。
ちなみにヒロインは

セイバー

桜

キャスター

バゼット？

凛、ライダー、イリヤは入れない予定です。

どれがいいですか？

主人公補正（改変）（前書き）

いつも武士道です。
ちょっと書いてて主人公強すぎじゃね？と思ったので
ちょっと弱体化させました。

主人公補正（改変）

主人公 伊達政宗へ転生者

武器
ひやつ

きむねちか

百鬼宗近 政宗の愛刀だつたもの。

阿修羅 あしゅら 戦国無双の伊達政宗の一丁拳銃。名前は思いつきで付けたもの。

鬼松 おにまつ 目が覚めると持つっていた、謎の妖刀。

能力？（注）今の所作者が考へてゐる能力です。

筋力増加 A

幸運 D

気配遮断 C

俊足 C +

騎乗 C

魔力 C

対魔力 B +

探知 A ~ 半径300メートルなら気配を消してもいなくとも場所

が分かるスキル

宝具？？（注）今の所作者が考へてゐる物です。

百鬼宗近 斬撃を波状にして飛ばす

鬼松 斬れば斬るほど切れ味が上がる。刀に宿るオーラ？で攻撃する。

阿修羅 無数の弾丸の雨を相手に浴びせる。一発の威力はランクB程度です。弾丸は政宗の魔力を打ち出している。

療養武妖（りょうようぶよう） 対象の傷や病・・・本人が危険と定めたものを治す事が出来る。しかし、本人が死んでしまうと今まで治したもののが戻ってしまう。

ちなみに本人には効きません。

宝具は念じると手元に出ます。阿修羅は常時携帯しています。

政宗戦闘スタイル

基本は一刀流です。すこし、ヤバイなと感じると二刀流になります。

少し、距離が離れていると阿修羅を使って攻撃します。

よく使う宝具は阿修羅。

このくらいです。

それでは、また次回！

出たよ・・・燕返し（前書き）

更新遅れています。ません。
武士道です。
これからもよろしく。

出たよ・・・燕返し

「はあ？」

俺が階段の上を見上げると立派な長刀を持った男が立っていた。といつより佐々木小次郎である。

「俺はサーヴァントじゃねえぞ」

「左様か、しかしながら強そうだな？どうだ、我と戦わせてみんか？」

要するに俺と殺し合いたいと言っている様な物か・・・

俺はあんまり戦いたくないし、この世界を狂わしたくないんだけどなあ

ん？そういえば、こいつセイバーと戦ったのか？聞いてみよう

「いいだらう、闘つてやる」

「話が早くて助かる。それでは早速・・・」

「ただし条件がある」

「何だ？」

「質問に答えてほし」

「言つてみる」

「セイバーとは闘つたか？」

「セイバーのサーヴァントといひ合つてもないが」

やはりこの世界の流れが狂っているな・・・

俺といひレギュラーが入つてゐるせいか。

まあそのことは後で考へよう、とりあえず今は・・・ここつだな。

「そつか。変な事を聞いてすまない、それじゃ始めよつか？」

俺は愛刀の百鬼宗近に手をかけて構えた。

小次郎もそれをみて長刀を構えた。

「お主は居合いを使うのか」

「そうだ、何か悪いか？」

「いや、何でもない。自己紹介が遅れたな、我は佐々木小次郎」

「俺の名は伊達政宗」

「ほう・・・独眼竜か」

「知つてもらえて光榮だよ、伝説の侍」

俺らはにらみ合つたままタイミングを計つた。

そして・・・

「こやー！」

「尋常にー！」

「勝負ー！」

同時に斬りかかった。

最初は俺がけん制の居合い：薪草を放つていた・・・小次郎は反撃する暇もなく押されているように見えたが、そうではなかつた。

俺は、小次郎を壁のところまで追い詰めた。

これで止めだと思ったその時、小次郎はあの構えをとつていた。

「秘剣
燕返しー！」

「しまつ！ーぐう！」

俺は燕返しの三太刀の中の一つは居合いで防いだが、最後の一太刀が俺の左腕に当たつた。

腕が取れなかつただけでも幸運だが、かなりの重傷である。俺は血だらけの左腕を押さえながら距離をとつた。

「ほひ・・・我が燕返しの一太刀を防ぐとは中々やるな
「くつ・・・・・」

マズイな・・・今の状態で斬りかかつてこられてらやりれる。療養武妖も自分には使えないし、どうする?

「では行くぞ!」

小次郎は長刀『物干し竿』を構えて向かつてきた。
俺は仕方なく片手で阿修羅を一丁抜いた。

「阿修羅

剣林弾雨!」

「何だと!・?・くつ

俺は阿修羅で弾幕を張つた。

しかし、一丁だけなので数が半分である。

小次郎は不意を突かれたのかもろに喰らつた。
これであいつは死なないまでも動けない筈だ。

「何とか・・・勝てたか?」

俺が安堵して腰をおろすと小次郎がひざをついていた。
どうやら、直前で燕返しを放ち防いだようだ。しかし、すべてを弾き返す事は出来なかつたようだ
体の数箇所から血が垂れている。

「どうやら・・・」の勝負、痛み分けと言う事になるかな?」

「せうりじこな

「お主、ここに何のようで来たのだ？」

「ただ、座禅を組みに来たんだよ」

「そうか、それは申し訳ないことをしたな

小次郎は満ち足りた顔をしていた。

本当にこいつがあの佐々木小次郎なのだろうか？
本物ではないとしてもこいつとは仲良くなればな

「それじゃあ、俺は行くよ」

「何処にだ？」

「アホか！病院に決まってるだろ！？」

「そうか、また手合わせしてくれるか？」

「ああ何時でもしてやるよ。真剣じゃなければな

「分かつた。さつとと行け

「その前に」

俺は小次郎に療養武妖をかけて、傷を治した。

小次郎は俺の力に驚いて、本当にサー・ヴァントではないのか？と聞
いてきたが俺は血がやばいため無視して病院へと急いだ。

そつ・・・・あの腹ペコ王が近づいている事も知らずに・・・・

出たよ・・・燕返し（後書き）

出来るだけ原作に近づけるように頑張ります。
少しオリジナル展開が入ってしまいますが、ご了承ください。
次回こそキャスター戦書くぞー！

俺、何か悪い事しましたか・・・・・・? (前書き)

武士道です。

不定期更新ですいません

俺、何か悪い事しましたか・・・・・・?

「お大事に〜」

「どうせ」

俺は病院での治療が終わり自分の手を見た。

「これじゃあ、激しい戦闘は無理だな」

包帯を巻き肩からぶら下がっている腕を見ながら俺は咳いた。
せいぜい、相手の攻撃を凌ぐのが限界だらう。
俺は士郎の家に帰るため出発しようとした。

「・・・・政宗」

「・・・」

俺はその冷たい声に黙っていた。

振り向くとそこにはあの腹ペコ王がいた。

「セ、セイバー? 何でここに? ・・・」

「なんとなくこいつのような気がしたのです。それより、何です?」

「その怪我?」

「ああ、少しサー、ヴァントと戦つてな」

「! ! ! サーヴァントー・ならば、今から倒して

「

「やめとナ

俺は小次郎の下に行こうとするセイバーを止めた。
セイバーは俺の意見に反論してきたが説得した所、渋々了解していく

れた。

「それより、政宗？」

「な、何だ？ セイバー」

士郎の家に向かっている途中、セイバーは俺の右肩を強く握り締めてきた。

「あの・・・セイバーさん？痛いんですけど・・・」
「まさか、朝の事を忘れてなんていないですよね？政宗？」
「いや・・・俺、怪我人よ？満足に動けねえよ？」

士郎視点

俺は夕食を作るため台所で桜と一緒に料理を作つていた。
すると

ガララ

「お？帰ってきたか？」

玄関が開いた音がしたので俺は向かいに行つた。

そこには、顔に痣が出来ている政宗と顔を満足したような顔をしているセイバーがいた。

「ビ、ビうしたんだ？政宗？」

「・・・ノーロメントで」

政宗は疲れたのか無言で自分の部屋に帰つていった。

「土郎……」飯はまだですか？」

「あ、ああもうすぐだよ」

「~~~~~」

「???.?」

何故かセイバーは上機嫌で居間へといつてしまつた。
そこで、俺は気付いた。

(政宗・・・捕まつたんだな。)

俺は、台所に向かつて料理を再開することにした。

その夜

「政宗・・・ビうしたのだ？その怪我？」

「ああ、本当はこれより軽い怪我だったんだがな」

俺は酒を飲む約束をして、アーチャーと屋根の裏で酒を飲んでいた。

本当は腕だけだった包帯も土郎から顔にも包帯を巻いてもらつていた。

アーチャーがおれの怪我の事を聞いてきたので説明することにした。

「実は、かくかくしかじかでな

「・・・大変だつたな」

「だろ?」

そうして、俺は一杯酒を飲み干した。

「それで、大丈夫なのか？その怪我」

「う～ん、明日には傷は塞がつてるとと思つ」

「そうか、なら安心だ」

アーチャーも一杯酒を飲んだ。

「それにしても、今の状態で戦闘になつたら大変だな」

「ふつ・・・・・そうだな」

「あつはつはつはつはつ！（笑）」

ズドオオオオオオン！！

「　　・・・・・」

俺ら一人は無言でお猪口を置いた。

「まったく・・・無粋な野郎だな。なあアーチャー？」

「同感だ」

俺らは怒り心頭で下に下りて言った。

「くつ！… こんな時に襲撃とは…・・・・・」

「ふふつ・・・・・観念なさい？セイバー」

「！」までか・・・・・

私はキヤスターの襲撃により、体を魔術で拘束されていた。
大河もキヤスターに操られてしまって、士郎が困惑している状況だ
った。

「藤ねえ！…目を覚ませ！…！」

「無駄です。士郎キヤスターに操られています。キヤスターを倒さ
ないと無理です。」

「流石のセイバーもそこまで、疲弊してたらこの拘束はとけないで
しょ？」「

「舐めるな！…！」

私は拘束を無理やり解いて、キヤスターに突撃をかけた。

キヤスターは大河を自分の目の前に置いて、盾にしようとした。

「くつ・・・・・」

「隙ありよ、セイバー？」

「しまつた！…！」

「セイバー！…！？」

キヤスターの出した短剣が私に当たる直前、障子が吹っ飛びそれが
キヤスターに当たった。

「な、何者！？」

「…・・・政宗？アーチャー？」

そこには、眼帯を付けた男と赤い服をきた男が立っていた。

「「酒宴の邪魔するのは～～だ～れ～だ～？？」

二人は赤いオーラを出しながら近づいてきた。キャスターも私も少し引きながら見ていると

「お前が～キャスター？」

「な、何よ！？」

「邪魔された酒宴のうらみ思い知れえ！！」

「な、何！？」

政宗は手に日本刀を呼び出し、キャスターに突撃した。

キャスターは魔術を政宗に向かって撃つが政宗は刀で魔術を切り裂きながら走ってきた。

「な、何なの。こいつ・・・・こには、逃げさせてもらひわ～！」

キャスターは逃げようと魔術を使おうとするが、何処からか飛んできた矢に邪魔をされた。

「ひつ～？」

「逃がさんぞ・・・・・」

二人の鬼神はキャスターを逃がさずに尋問を始めた・・・・私は政宗のあの時の顔を思い出したくもない。

俺、何か悪い事しましたか・・・・・・? (後書き)

次回はキャスター戦終了です。
ヒロインはセイバーとキャスターに予定です。
他のキャラは原作どおりにしたいと思っています。

雑種、雑種ってあまり呼ばないで・・・泣けてくるから（前書き）

武士道です。

更新がマイペースで本当にすいません。

雑種、雑種ってあまり呼ばないで・・・泣けてくるから

「・・・それで?『反省してんの?』

「悪かつたつていつてるじゃない!..早くこの縄ほどこよー!..」「ああん?何だその口の聞き方はあ・・・いちじら、楽しみにしてた酒宴を邪魔されたんだぞ?」

「う、御免なさい」

「よし、分かればいいんだ・・・」

ふ~俺の今までの鬱憤をすべてぶつけた様でせっぱつしたけど、申し訳ないことしたなあ

俺も子供だよな~たかが酒宴を邪魔されたくらいで怒るなんて・・・

そう思いながら俺は素直に謝ってきたキャスターの縄を解いた。

「アーチャー

「む?何だ?セイバー?」

「私は政宗の本当の姿を見たような気がします・・・」

「奇遇だな、私もだ。それにしても、あれほど怒るとまみまび楽しみにしてたのだろう

「・・・」「

アーチャーとセイバーはキャスターの縄を解いている政宗を見ながら思つた。

((政宗をあまり怒らせなによつてよつ・・・))

「ほら、好きなところへ行け」

「あ、ありがとう」

俺はキヤスターを外で縄を外して見送っていた。
ああ～さつきから何か嫌な感じがする。

俺は先程から自身のスキルの1つの探知で嫌な魔力を感じていた。
しかも、それはこっちに向かってきている。
うわあ～嫌だよ～面倒くせえよ～

「と、とりあえず、早く帰れ」

「？？ 分かったわ。確認しておくわ、私達は同盟を組むって事で
いいのよね？」

「ああ、それでいい」

キヤスターはそれを聞いて安心しながら帰ろうとしたが、突如降つ
て来た剣によつて体を貫かれた

「！！ あ・・・・・が・・・・・」

「キヤスター！？」

「どうしました！！ 政宗！？」

「何があつたのか？」

俺の大声に反応してセイバーとアーチャーも外に出てきた。
キヤスターは腹から相当の血を出していった。
俺はすぐさま療養武妖を使って傷を癒した。

「まつたく、雑種の分際で我が前を歩こうとするとは
「げつ・・・・英雄王」

俺が闘いたくないランキングのナンバー2、ちなみに一位はバーサ
ーカー

英雄王はキヤスターと俺に向かつて王の財宝ゲート・オブ・パヒロンで攻撃をしてきた。

俺はキヤスターを抱えながらそれを避けた。

「ふん、先程の雑種よりは出来るようだな

「そりゃどうも」

「ふん、先程の雑種よりは出来るようだな

俺はとりあえずキヤスターを玄関へと置いて英雄王と向き合つた。
・・・ヤバイです。勝てる気がしません・・・

「ほう、雑種の分際で俺と闘おうといつのか?」

「・・・・・ふつ」

「政宗!…その男は危険です!…下がってください!…」

「・・・・・」

「貴様!…王の問いに答えるとはい度胸だな!…殺してくれる!…」
「…・・・・・しまつた、ちょっと格好つけようと思つたら間を空けす
ぎた・・・・」

「貴様あああああ!…先程からふざけおつてええええ!…」

「ざやああああああああああああああ!…」
「・・・・・馬鹿?…」
「・・・・・」

英雄王の宝具達が俺に向かつて飛んできた、俺はそれを阿修羅で牽

制しながら避けていた。

畜生！！！ただでさえ俺怪我人なのに、何だよこれ！！

それと、そこの二人！！可愛そうな人を見る目で俺を見るな！！

古事記傳

「ここの、ちょこまかと……雑種如きが……」

「あのわ、わざとさから雑種、雑種ついでにやめてくれよ。あいつらには変な目で見られるしもつひんぞりなんだよ……」

思わず言つてしまつたこの言葉、うん分かつてるよ~自分でも死亡フラグが立つて事位。

「何だと？貴様、雑種の分際で王に意見しよつといつのか？」

L

「ん? 聞こえんぞ? 雜種!」

なー！？ぐああああああああああー！」

俺は力チンと来たので英雄王の隙を突いて百鬼宗近を呼び出し波状の斬撃を英雄王に当てた。

それを喰らつた英雄王は何処かへ吹つ飛んでいつてしまつた。

」・・・・・・・

俺がセイバーとアーチャーを見るとセイバーは既にいなく、アーチ

一人中庭に残されて、英雄王が飛んで行つた方向を見た。

「やつひやつたな～・・・・俺。」

死亡フラグが出来ちゃつたよ～～！！

もうこじうなつたら、英雄王倒すしかねえじゃん！！

「それで、どうするのだ？」

「・・・アーチャーか」

アーチャーが俺が中庭でしょげてこると後ろから話しかけてきた。

「貴様なら倒すまではいかないまでも手傷を負わせる事位は出来た
筈だが・・・・？」

「おいおい、俺を買いかぶりすぎだぜ？」

「まさか・・・あいつも救うとかぬかすのではあるまいな？」

あっいや～～流石はアーチャーばれてた？
まあ、一応殺すつもりは無いんだけどな～

「まあ、聞き分けがないようなら殺すけど」

「そうか、な～い」

「それより、もう寝よ～ざ？こんな時間だ」

「私はこれから凛の所へ帰らなければならん

「そうか。しつかりな」

「ふつ・・・・貴様もな」

俺はアーチャーと別れると自分の部屋に行って寝る事にした。

俺は部屋の電気を消して布団に入つた。

「それじゃあ・・・・お休みなさい」

「ちよつと待ちなさい（待つて）！」

「あ～？俺はもう眠いんだ、明日にしてくれよ～」

「…………」

「あれ？ちよつと待つて、セイバー？それに何でキャスターも？」

何故かセイバーは俺の肩を握り締めてきた。

しかもこいつ俺の肩をみしみしくまで握ってるんですけど……あつ、そのまま連れて行かないで、何か一人とも怖いぞ？

「政宗……話があります（あるわ）」「

「ひいいいいいいいいい！」

グッバイ

俺

俺は眠いんだよ・・・・邪魔しないで?後生だから・・・(前書き)

武士道です。
更新頑張ります。

俺は眠いんだよ・・・邪魔しないで？後生だから・・・

俺はセイバー達に引きずられて居間に連れて来られていた。
そういうえば、キャスターは療養武妖かけたまま置き去りにしてたん
だっけか？

「单刀直入に聞くけど、あなたのその能力は何？魔術では無さそう
だけど？」

「あ、ああこれは療養武妖つて能力だ。俺が危険と思つた物を無く
すことが出来る能力だ」

「・・・それって、凄い能力なんじゃないかしら？」

「いや、所詮この能力は騙しているだけさ」

「騙す？」

「そつ、騙すだけさ」

療養武妖は確かに俺が危険と定めた物を消す事が出来るが、俺が重
傷を負つたり死んだりすると今まで療養武妖で治して来たものが全
部元通りになつちまうからな～
俺から言わせりや、こんな能力氣休めにしかならねえし。

「意味が分からないわよ・・・ちゃんと説明して」

「まあ簡単な話、俺が重傷を負つたり死んだりすると直してきたも
のが戻りますよって話だ」

俺がそういうとキャスターが慌てた様子で話してきた。

「ちょっと待つてよ、それじゃあ私のあの傷は・・・？」

「まあ、俺がやられたら戻るわな」

「ちょっとー！それってやばいんじゃない！？」

分かつてるよ・・・そんな事位。

だから、これから治す方法を考えるんじゃねえか。

「まあ、お前の傷については心配はいらないだらつ」「・・・どうしてよ?」

「それはだな・・・おに凜、どうせ聞いてたんだろ? 出て来いよ?」

「・・・気付いてたのね」

凜は悔しそうに襖を開けて入ってきた。
ここだけの話、あいつ顔丸見えでした。
それにもしても、アーチャーとは行き違いう事になるのかな? これは・・・

「それで、どうだ? やれるか?」

「まあ不可能ではないけれど・・・」

「よし! ! それじゃあ、決定つと」

俺はキャスターと凜を連れて中庭に出た。

「それじゃあ行くぞ?」

「何時でもどうぞ?」

「凜はどうだ?」

「ええ、何時でも来て」

「よし・・・・・」

俺は目を閉じてキャスターの頭に手を置いてキャスターにかけていた療養武妖を解除した。
すると、キャスターの腹から血が再び出てきた。

それを見た凜はすぐさま、治療を開始してキャスターの傷をふさぐ事に成功した。

「これで安心だな」

「そうね、それじゃあ私は戻るわ」

「私も眠くなつたから寝るわね」

「ああ・・・」

俺は一人と別れ再び居間に入った。

すると、そこにはセイバーが茶を啜りながら待っていた。

「それで・・・お前は何のようだ？セイバー？」

「政宗・・・実はですね・・・」

「何だ？どうしたんだ？」

「あなたがこの前連れてきた女性が

「目が覚めたのか？」

「ええ、一時的にでしたが・・・すぐにまた眠りについてしまいました。」

ふむ・・・見た目的にあの女は強そうに見えたのだが。
まあ今度起きたときにでも話をしてみるとするか・・・
それよりも、英雄王をどうにかせんとな・・・

「セイバー、あの野郎のことなんだが・・・」

「それは・・・ギルガメッシュの事ですね？」

「分かつてたのか」

流石はセイバーと言つた所か・・・

俺は自分の茶を淹れて、セイバーの向かい側に座つて話を続けた。

「実はなセイバー、俺はあいつを腰にせめよつと黙つていろ」

「罷・・・とは?」

「簡単な事だ。俺が困になつてお前らが待ち伏せしてゐる所へ誘導し、お前らが一気に宝具で片付けるところ作戦だ。シンプルな作戦だろ?」

「しかし、私にも騎士としての誇りが・・・」

甘い事を・・・俺が生きてきた戦国じやあこれ位当たり前だぞ? よく、これで一国の王が務まつたものだ。

そんなんだから、てめえの国を滅ぼす事になるんだよ。

「あのなあセイバー・・・

「何です?」

「お前、それでも王か?」

「・・・・・どうこう意味ですか?」

「言葉通りに意味だが?」

俺がそうこうとセイバーは少しムツとした表情で話してきた。

「あなたは私を愚弄するのですか?」

「だつてそうだろ? これしきの判断に何を迷つ必要がある? それに、お前は十分すぎるほどその綺麗な手を血に染めた来た筈だぞ? 今さら綺麗事を語つつもりか?」

「ぐ・・・・・」

「どつした? もつ返す言葉も無いのか? はあ、よくお前みたいな奴が王なんてやれたな」

「黙れ! -!」

セイバーはそのまま俺に向けていた。

まったく、すぐに感傷的になる・・・これほど、やつ易い相手はないな。

俺は少し溜め息をついていると

「政宗・・・私と勝負です」

「ほづ・・・いいぜ。俺も実際、この前のおかずの借りを返したいと思つてたんだ」

「手加減はなしですよ?」

「その言葉・・・後悔すんなよ?」

セイバーは茶を飲み干すとすぐに道場に向かつて行つてしまつた
俺も茶を飲み干して台所にセイバーに分まで茶器を運んで道場へ行く事にした。

少し言い過ぎたかな・・・

俺は少し後悔しつつも道場へと足を運んだ。

セイバーとの練習試合（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

セイバーとの練習試合

俺が道場に着くとセイバーは正座をして待っていた。
・・・・・どんだけ、やる気満々何だよ。

「すまん、待たせたか？セイバー」

「・・・構いません。それより、早く始めましょう」

セイバーはそう言ってすぐに竹刀を構えた。
俺もすぐに近くに置かれている竹刀を拾い構えた。

「そうだセイバー」

「・・・なんですか？」

「後悔すんなよ？」

「・・・・・そのよく喋る口を切り取つてやります！」

セイバーは俺に向かつて突撃し、初めに縦に剣を振り下ろしてきた。
俺はそれを横にかわすと、すぐに追撃の横への剣閃がやつってきた。
それを俺は竹刀で受けたワザと後ろに飛ばされた。

「何故打ち込んでこないのです？政宗？」

「ん？ その程度の剣なら余裕だな」と思つて返さなかつただけ
だぞ？」

「・・・このつ！…」

セイバーは大きく振りかぶつて俺に向かつて縦に振りかぶつた。

アホ・・・隙だらけだぞ？

だから、感情的な奴ほどやりやすいんだ・・・

俺はセイバーの上段からの攻撃を竹刀で受け流してバランスを崩させた。

「！！ しまつた！？」
「隙やりだぞ？ セイバー？」
「くつー！」
「遅い・・・ 居合いで哈語！」
「うつ・・・・・！」
「如月」

俺はそれを見逃さず居合いの体制でセイバーに一歩近づいた。それを見たセイバーはすかさず反撃をしようとするが、俺は居合いでセイバーの竹刀を弾いた。

「じゅせり・・・俺の勝ちのよつだな？ セイバー？」
「くつ・・・・・」
「お前は感傷的になりすぎぬ・・・だから、お前の剣は止まつている様に見えるぜ」
「・・・・・」
「大体、お前は士郎に甘いと言つが俺から言わせりやお前も十分過ぎるほど甘い」
「・・・・・」
「まあ・・・でも、俺はそういうの好きだぜ？」
「え・・・・？」

俺も昔はお前らと一緒にいたしな・・・・・馬鹿だよなあ、戦国の世を俺が統一して幸せな国家を作りつとしたんだから・・・・・まあ失敗しちゃったけどな。

「とりあえず、さっさはすまなかつたな。俺も言ひ過ぎたよセイバ

ー

「いえ・・・私の方こそ政宗に剣を向けてしまつてすいません」

「とりあえず、仲直りの印に飲むか?」

俺は手でクイックと酒を飲もうとジェスチャーすると

「いえ、私は結構で

「よ～し、決まりだ。実はほらもうここにあるんだ

「私の話きいてますか!?

「

「おのれええええ!! 雜種如きが我に傷を負わすとはあああーーー

とある道端に倒れていたギルガメッシュは憤慨していた。
怒りの矛先はあの眼帯をしていたあの男である。

「あの男・・・名は政宗といったか? 許さん!...許さんぞ!...」
「アーチャーそこまでにしといたらどうだ?」

「・・・・綺礼か」

「くくく、どうしたその傷は? 誰にやられたのだ?」

嫌な感じで話をしてくれるこの男は言峰教会の神父、言峰綺礼である。
ギルガメッシュは政宗がつけた腹の傷を押さえながらいつた。

「綺礼・・・あの男は何者だ?」

「ふつ・・・あの男か？あいつはこの国の戦国時代という時代に生きた有力大名だ。お前らの言葉でいうなら地方の領主様と言った所か・・・・・」

「地方の領主だと！？ その程度の存在が我に傷をつけたというのか！？」

「ギルガメッシュ・・・奴を侮るな

「何だと・・・・・？」

綺礼は意味深げな表情で話し始めた。

「あいつは何気に他のサーヴァントと同盟を結んでいる。確認しているだけで、セイバー、アーチャー、ライダー、キャスターこの四体だ。流石は奥州の独眼竜、考える事が早い・・・・」

「ふん！ いくら雑種が集まつと我の敵ではないわ！－！」

「どうかな？ いくらお前でもサーヴァント四体に攻撃されたらひとつまりもないのではないか？」

「・・・・・」

「それにこの四体に加えて独眼竜も加わるのだぞ？ あやつはサーヴァントではないが、サーヴァントに匹敵する力を持つている。」

「・・・・・」

「！」の分だとおそらくバーサーカーとも同盟を組むつもりだらつ

「我に何をしろと言つのだ・・・・？」

「簡単な話だ・・・・ランサー」

綺礼がそう言つと青いスーツを着て赤い槍を携えた男が現れた。男は不機嫌そうに答えた。

「何だよ・・・マスター？」

「お前には独眼竜と鬪つてきらう

「何だと？」

「おそらく奴はバーサーカーと同盟を組むために他の同盟しているサーヴァントを総動員して同盟を組もうとする筈、そして奴は離れて様子を見ている筈だ。そこを襲え」

「俺に不意打ちをしろつてのか・・・・」

「そうだが?」

「チツ!! わあつたよ、やつてやる!!

ランサーはそう言って何処かへ行ってしまった。
ギルガメッシュは不安そうに言つ。

「何故奴を行かせる?」

「なあに、偵察だよ。ランサーがやられても構わん、奴の実力をし
れるのならな」

「・・・・・」

「今は奴を泳がせておけ……鬪うのはその後だ」

「よかろう……待つてやる」

その時の衛宮邸

「あつはつはつはつはつーーー

「セ、セイバー！？」

「どうしたんれす？政宗？」

あの後、俺たちは再び居間にようして俺が部屋から持つてきた酒を飲んでいた。

セイバーは俺が薦めたお猪口一杯の日本酒を飲んだ瞬間……酔つた。

見れば分かるがマジで酔つている。

「政宗えーーー？」

「なつ何でしようか？」

「もつと飲みましょー

「え・・・でもこれは俺がとつて置いた最後の酒

俺はこの前アーチャに貰った高価な日本酒を抱えていった。しかし、醉拳状態のセイバーは聞く耳を持たない。

「いいじゃないですかあ～、少し位・・・」

「駄目だつて・・・これはマジで駄目だつて

「いいから飲みましょっ」

「ああ・・・・・・」

その後の俺は酒を無理矢理口に突っ込まれ、吐くほど飲まれた。
一方セイバーは

「グーグー」

「この野郎・・・気持ちよそぞろに寝やがって、これでも喰らえ!」

俺は懐にあった座布団をセイバーに投げたがセイバーは本当に寝ているのか?というレベルの反応で座布団を投げ返してきた。
それを喰らった俺は思い切り壁に激突した。

「ここつ・・・寝ている時のほつが強いんじゃね?

「ゴハア!~」

俺はそのまま気を失ってしまった・・・

「口轄について辛いよね・・・分かります。（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

「口辭いつて辛いよね・・・分かります。

俺が目を覚ますと士郎が朝飯を作っていた。

士郎は俺が目を覚ました事に気がついたのか、話しかけてきた。

「目が覚めたのか?政宗」

「ああ、まったく酷い目に遭つた」

「ハハハ・・・そうみたいだな」

士郎は散乱しているテーブルと俺の隣で泥酔しているセイバーを見ながら苦笑した。

さてと・・・今日はバーサーカーと手を組む事にするかな?
俺はそう考えながら士郎から新聞を借り、トイレに向かつた。

「とりあえず、ギルガメッシュは保留だな・・・」

俺は新聞を見ながらブツブツと呟いていた。

他の人から見られていたら危ない人と勘違いされるだろう。

言峰もギルガメッシュも大人しくしてしてくれれば、助かるんだけど・・・

ああゆう、危ない考え方が問題なんだよな～

言峰については危ない思想ならば・・・消去という事で決定かな?
まあ、説得出来たら説得するとしよう。

「ふう・・・」

俺は新聞をたたんで、トイレから出て居間に向かった。

「おお・・・今日も美味そつな料理だなあ?土郎
「ああ、ありがと政宗。それより、セイバーは・・・
「ん?」

俺がセイバーを見るとまだ寝ていた。
仕方ないので起こす事にした。

「おいセイバー」
「うーん・・・」
「仕方ない・・・一日酔いだらうが、許せ!・・・セイバー!・・・」

俺はセイバーの服を掴み、そのまま庭の池へとブン投げた。

ドボオオオーン!-!-という音と共にセイバーは慌てながら水から出てきた。

「はあ・・・はあ・・・政宗?もづ少し優しく起こし方は無いので
しううか?」

「いやあ、お前が中々起きないもんだからこの方法ならと思つてだ

な・・・」

「言い訳はそれで終わりですか・・・?ウブ・・・

「おいおい、無茶すんな。」

「うう・・・申し訳ありません。政宗」

俺の読みどおりセイバーは一日酔いだった。
俺はセイバーを抱いでトイレに送った後、居間で飯を食べていた。

「さて・・・士郎」

「ん? 何だ政宗?」

俺が箸を置いて、士郎に話しかけると士郎は普通に返事をしてきた。

「・・・・・」

「おい、どうしたんだよ? 政宗?」

「・・・・・」

この前のあの慢心野郎を見ても何も感じていないと云うのだろうか?

あいつは確かに傲慢で隙だらけだが、あいつの力は確実に危険だ。

「おい、士郎。この前の金ピカ野郎の事だが・・・

「は? 金ピカ? 何を言つてるんだ? 政宗」

「・・・・・」

すまん、危機感以前の問題だった。こいつ、そもそもあの金ピカの事を見ていなかつたのか。

「はあ・・・・まずそこからか。」

「そこからつて・・・何処からだ?」

「まず、俺の話を聞け」

「あ、ああ分かつた」

俺の士郎に対する金ピカについての説明を始めた。

政宗と十勝（前書き）

「んにちわ、武士道です。
更新頑張ります。」

「まあ、簡単な話。実は昨日、サーヴァントが現れたんだ」「何だつて！？」

ただいま俺は士郎に向かって、あの傲慢野郎の説明をしていた。それにもしても、こいつ俺の話分かつてんのか？

「そのまま俺は士郎に向かって、あの傲慢野郎の説明をしていた。それにもしても、こいつ俺の話分かつてんのか？」

「お前よお・・・俺の話聞いてた？」

「いや、聞いてるけど・・・」

「こいつ・・・・・あいつの危険性がわからんねえのか？あいつ、傲慢で馬鹿だけど実力は本物だぞ？」

「・・・とにかく、あいつを危険と判断した俺はあいつに對して包围網を敷く事にした」

「包围網？」

「ああ、皆で結託して敵をやっつけましょうってことだな。ちなみにキヤスターとライダー、アーチャーは納得している」「なるほど・・・・」

士郎は納得したような表情で頷く。

さてと、問題はバーサーカーだな・・・・・どうするか
そう思っていた俺は、士郎の顔が見えて閃いた。

「ど、どうしたんだよ？政宗？」

「ナイスだ士郎。お前のお陰でいい考えが浮かんだ」

「？？？」

俺は士郎に親指を立ててグーサインをして、部屋を後にした。

士郎視点

「一体何だつたんだ・・・？」

俺は部屋から上機嫌で出て行つた政宗を見ながらそう思つていた。

「・・・・」

俺は外を見ながら、政宗が俺に向かつて言つたあの言葉を思い出していた。

『人には出来る事と出来ない事がある。それを見極めない限りお前は本当の意味で人を救えない』

・・・・本当の意味で・・・か。

そうだ、一度政宗にその事について聞いてみよう。

俺はそう思つて、政宗の部屋へと向かつた。

「・・・・」

俺は自室で今後の事について考えていた。

とりあえず、英雄王包囲網については依存は無い。

問題は綺礼の事だ・・・一体何を考えている?

あいつならば今の状況の悪さは理解している筈だ、あいつの陣営は英雄王とランサーの二人だけ

バーサーカーを含めた、俺らが総攻撃を加えればすぐに片がつくだろ。

なのに・・・何故動かない。

「駄目だ・・・どうも、今日は頭が冴えん。一休みするとしよう」

そう思つて、俺はライダー戦の時に買った歴史の本を読み始めた。何故かって? 俺があれだけ頑張つて歴史を変えようとしたんだ。少し位、歴史が変わつてもいいだろ? まあ、結果は見えるけどな。

「・・・・やつぱりか。結局、何も変わっちゃいない・・・か

俺は膝に肘をついて顔を覆つた。

歯を噛み締めながら、悔しい気持ちを殺した。

「あれだけ・・・頑張ったのに、どうしてだ? あれだけのたくさんの部下や関係のない民の命を散らさせて置きながら・・何をやっているんだ? 俺は・・・・

俺は少し涙に涙を浮かばせながら、昔の事を思い出していった。すると、弓を弓弓弓とたたく音が聞こえた。

「・・・・どうぞ」

入ってきたのは士郎だつた。・・・・・一体何しに来たんだ？
まあ、いいか。俺も頼みたい事があつたし・・・

「それで、どうしたんだ？士郎」

「ああ、実は政宗に聞きたいことがあつて・・・・」

「聞きたい事・・・・・？」

「なあ、本当の意味で人を助けるつてどういう事なんだ？」

「本当の意味・・・・ねえ」

俺は顎を手でさすりながら考えた。

戦国の世に生きた俺にそれを聞くか・・・・只の人殺しの俺に。

「そうだなあ、例えば士郎は目の前に死にかけている人間がいる。
そいつを見てどうする？」

「もちろん。助けるさ！－」

「ほう・・・・それじゃあ、お前はそいつを治療出来ると言つ事な
か？」

「それは・・・・・

「俺が言いたいのはそういうことだよ・・・・・

ちなみに今の話は俺の実体験の話だ。

「・・・・・」

「いいか士郎。どんなに人を救いたくても救う方法が分からなかつ
たら意味が無いんだ」

「・・・・・」

「俺から言わせりや、医者の方がよっぽど正義の味方に見えるぜ？
でも・・・・・」

士郎はまだ納得していない様子だつた・・・

まったく、世話の焼ける主人公だな。

「それじゃあ、お前はどういう風に人を救いたいんだ?」

「それは・・・」

「もしゃと思うが・・・セイバーのようにとか言わないよな?」

「えつ・・・」

やつぱりか・・・予想通りすぎて笑えてくるな。

「あのなあ士郎・・・英雄は英雄なりに辛い事をいくつも経験しているんだぞ?」

「そんな事は知ってるよ」

「それじゃあ、お前は自分の野望のために実の父親を殺せと命じる事が出来るか?」

「え・・・?」

俺は真面目な顔で士郎に問いかけた。

「おい、政宗。それってどういつ

「すまん。今の話は忘れてくれ。それより、士郎、凛や桜ちゃん、キヤスターの組も居間に呼んで置いてくれるか?話があるんだ。セイバーには俺から伝えておく。」

「わ、分かった」

俺は頭を搔きながら部屋を出て、セイバーを呼びに言つた。

セイバーを説得せよーー（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

セイバーを説得せよー！

「セイバー？セイバー？……まったく、何処にいるんだ？」

俺がこれから的事を説明する為にセイバーを探している所だ……
それより、あいつ何処行つた？

「政宗……」

「おっ！そつちか？　まったく、何してんだ……セイバー？」

俺がセイバーの声を頼りに着いた場所はトイレ……もしかして

「もしかして……まだ吐いてんのか？」

「はい・・・・・」

「仕方ねえなあ・・・・・」

俺はセイバーの背中をさすつてラクにさせようとした。
そして・・・・・

「ふう・・・・ありがとう政宗。あなたのお陰で随分楽になつた
「そうかい、そりやよかつた。それで、これから話があるんだが・・・
・来れるか？」

「勿論です」

「そうかあ？無茶しなくていいんだぞ？」

「くどいですよ・・・・政宗」

「はいはい、それじゃ行くとしますか」

そして、俺らは居間へと向かった。

俺らが居間にしつくと既に全員がきていた。

「おっ？ もう来てんのか？ 早いな」

「はあ・・・君が呼んだんだろう？ 政宗」

「おお、 アーチャー。久しぶりだな」

「昨日会ったような気がするのは私だけかな・・・？」

「そりだつたか？ まあいい。それじゃ、始めるか」

俺はそう言つて、全員に俺の考えを発表した。
案外、俺の考えにほとんどの奴が賛成してくれた。
しかし、一人だけ賛成しなかつた奴がいた・・・勿論、セイバー
である。

「私は反対ですよ？ 政宗」

「セイバー・・・政宗の提案は悪くないと俺は思ひぞ？」

「士郎は黙つていてください」

「すまん・・・」

「おい・・・士郎はお前のマスターだろうが。士郎が可哀想だろ！！！
と俺は言いたがつたがセイバーの迫力を見るに本気で反対のようら
しい。

「何故だ？」

「政宗・・・私は騎士です。あなたの言つ事は正しい・・・だけど、

私は騎士らしく正面から戦いたい」

仕方ないな・・・」 いつも言つたら聞かないタイプだし。

「分かつた・・・お前は俺と来い」

「え？」

「俺と一緒に囮役になれと言つていいんだ」

「しかし

「

「いいじゃねえか。お前が自分に実力があると想つなり、そこであの野郎を倒せばいい……だろ？」

「……確かにそうですね」

「それじゃ、お前が倒せないと俺が判断したら作戦を実行するからな？」

「はい、それで構いません」

「よし、決まりだ」

俺は咄に解散と言つて、屋根に向かつた。

「アーチャー？ どうしたの？」

「いや……何でもない。凛、私は屋根で見張りをするとしよう。」

「ええ、頼むわ」

そして、アーチャーは靈体化して行ってしまった。

セイバー視点

「政宗……」

何故でしょ？ ……今日の政宗はいつもの元気が無いくつに見えましたが。

「どうした？ セイバー？」

「いえ、何でもありません。士郎

政宗は・・・一体どんな事を生前したのでしょうか?気になりますね・
・・・

政宗に聞いて見ましょうか・・・
私はそう思いながら政宗を探しに行つた。

「・・・・・」

俺は屋根で日を瞑つていた・・・そして、戦国の風景を思い出しついていた。

『政宗様あ!』

『何事だ?』

『それが・・・輝宗様が

『何!? 親父が一本松義継に攫われただと!』

『はつ! 現在、逃亡中の事!!』

『馬鹿親父・・・急ぎ馬を用意せよ! 追いつかせ!』

『はつ!』

「政宗!」

「ひつお! 何だ、セイバーか・・・どうした?」

俺が昔を思い出しているときなり声をかけられたので驚いてしまつた。

セイバーは変な顔をしながら俺を見ていた・・・何だ?

「政宗……寝ていたのですか?」「

「あ、ああ……昔の夢を見ていたようだ」

「昔……ですか」

「ん? どうした?」「

セイバーは少し女の子らしい顔をしていました……一体どうしたといふのだろう?

「政宗は一体どうこうとをした人なのですか?」「

「……それを聞いてどうする?」「

「どうもしませんが……?」「

「……そうかよ

俺は少しムスッとしながら、昔話を始めた……

「俺は……実の父親を撃ち殺した男だ。」「

「え……?」「

「それに……敵の降伏を許さずに皆殺しにした事もあったな。引

くだろ?」「

「そんな事は……」

「いや、いいんだ。自分で分かってる。」「

俺は顔を手で覆いながら話を続けた。

「何で……こいつなつまんたんだろうなあ。分かつてた……ハズ
なのになあ

「分かつてた?」「

「あれ? 言つてなかつたつけ? 俺が……いや、やつぱやめとく
ちょ、政宗! ? 気になるではありますか! ?」「

「すまないな、この話はまた今度だ! !」「

俺は屋根から飛び降りて、自分の部屋に向かった。

最後のペース（前書き）

武士道です。
更新頑張ります

最後のピース

ドサ

俺の部屋に置いてある本の山が崩れた音を俺は静かに聞いていた。

「ん~・・・・どうすつかなあ」

俺は、ギルガメッシュを倒す最後のピースのための作戦を考えていた。

「とりあえず、アーチャーと相談してみるか・・・

俺はアーチャーと相談する為に凜に居場所を聞きに行つた。

「は?アーチャー? あいつならさつき、屋根で見張りをするつて
いつてたわよ?」

「見張りか・・・分かつた。ありがとな」

俺はアーチャーを追つて再び屋根へと向かつた。

セイバー視点

「気になりますね・・・・政宗の最後のあの言葉

私は政宗が行つた後も屋根で政宗の最後のあの言葉に考えていた。

『あれ？ 言つてなかつたっけ？ 僕が……いや、やつぱやめとく

「…………」

一体何を隠しているのでしょうか……？
それにしても、政宗の過去……もう少し聞きたかったです。

「アーチャー？ あれ？ いねえのか？」

「政宗？ どうしたのだ？」

アーチャーを探して、俺が声を出して探していると急にアーチャー
が出てきた。

「ああ、実はアーチャー相談事があるんだ」

「ふむ……君が相談事とは珍しいな……まあいい、聞くとしよ
う」

「ああ、実は

「政宗？ 一体何をしているのですか？」

何故か急にセイバーが現れた……つーか、まだいたのか？

「お前……まだいたの？」

「え、ええ少し考え方があつて……それより、何を話そうとして
たのですか？」

「実はだな……バーサーカーを仲間にする方法を考えたんだ」

「バーサーカーを？」

「政宗……それは、難しこと思ひや?」

・・・・分かつてゐよ。正直、今考へてゐる作戦も100%成功する自信はないしな……しかし、決して確立が零といつワケではない。

「分かつてゐ、だが希望はある」

「希望?」

「それは

「それは?」「

「・・・・・士郎を使つ

「はあ!」
「

最後のペース（後書き）

今回は少ない量ですいません。
次回からは何時もどうぞお siti します。

英雄王包囲網を結成せよ……（前書き）

武士道です。
更新遅れてすいません。

英雄王包囲網を結成せよ！！

「政宗……何を言つていいのです？土郎はろくに魔術が使えないのですよ？」

「それは分かつてゐる。だが、土郎にやつてもらうしかないんだ」

「ほう……それはどんな理由かね？」

「……この所、あのクソ神父の動きが無い」

俺がそう言つと一人は気付いたのか顔をしかめた。

「成る程な……確かに、あの神父が動きを見せないわけが無い」

「そうですね……私達の戦力はバーサーカー以外のすべてのサー・ヴァントが集まつてゐるのに何の動きを見せないのは妙ですね」

「だろ？」

二人は頷くと俺は話の続きを始めた。

「そこでだ……俺は交渉をせずお前らの後ろから見ていることにするよ」

「何故ですか？」

「大方、あの神父の事だ……おそらく、ランサー辺りに俺を暗殺させようとするだろうからな」

「確かに……あの神父ならやりかねないか」

うん。やっぱり、アーチャーは物分りがよくて助かる

「しかし……何故士郎なのです？ 別に凜でもいいと思いませんが・
・・・」
「ん？ そりゃあ・・・」
「それは？」
「なんとなくだ」
「なんとなくだ」
「・・・・・」
「・・・・・」

「おい、何だよセイバーその田は・・・
確かに勘に頼つたのは悪かったが、士郎ならイリアと向とか話を
してくれると思うしな。

「まあ、いいでしょ。私や、アーチャー達が居ますしね
「ああそうだ。キャスターは連れて行かないからな？」
「何故です？」
「あいつの宝具が必要なんだよ

その後、三十分間話しそうく作戦が決まった。

翌日

「これでよしと・・・

俺が準備をして外に出ると既に全員が集まっていた。

そこに居たのは、バーサーカー、アサシン以外のサーヴァントと土郎、凜達・・・他のマスター？ 危なっかしくて連れて来れないだろ？

「政宗、準備は出来たのか？」

「ああ、土郎。この作戦はお前にかかると言つていい、頑張つてくれ」

「分かつた」

「それと、キャスター。作戦は頭に入っているか？」

「ええ

「よし、それじゃあ行くか？」

俺らはイリヤスフィールが待つ、アインツベルン城へと向かった。

「あれ？ 土郎じゃない・・・何か御用なの？ それとも死にに来たのかしら？」

「待つてくれイリヤ！！ 僕達は戦いに来たわけじゃない！！」

「戦いに来たわけじゃない？ それじゃあ、どんな用事で来たと言うのかしら？」

「俺達は交渉に来たんだ！！ イリヤ、俺達と同盟を結ばないか！」

「？」

土郎の説得開始を俺は離れた木の上から、双眼鏡で確認していた。そして、後ろを向いてキャスターに確認をとる。

「キャスター、予定通り俺の200m後ろで待機してくれ
「分かったわ」

キャスターは一瞬でその場から消えてしまった。
俺は双眼鏡で再び、士郎達を観察する。
どうやら、思ったよりてこずっている様だな・・・まあ、凛もい
るし大丈夫だろ。

「さてと・・・俺の予想通りに来るかな?」

俺は綺礼が、俺の予想通りに動いてくれるのを願いつつ、士郎の交渉の様子を伺っていた。

奇襲（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

おーおい・・・士郎ミスるんぢゃないんだろ? な?

俺は双眼鏡を覗きながらそう思つていた。

凛とアーチャーがナイスなフォローをしていてくれているようだが、士郎の奴は普通に話しているつもりでイリヤを怒らせているようだ。

・・・どうする? 俺が行くか?

いや、もしかしたら言峰の奴が奇襲をかけてくるかもしれないしな。

・

ここは様子見といつ。

「どれ・・・少しばかり集中してみますかね」

俺は集中して探知のスキルを使った。

集中してこのスキルを使えば、半径300m以内なら例え気配遮断のスキルを持つてもすぐに捉えることが出来る。

集中してみると、森の奥から誰かが来たようだ。

大方、ランサーの奴だろう・・・

「政宗、敵が来たわ」

「ああ、そのようだな。予定通りにキャスターは俺から距離をとつていてくれ」

「分かったわ」

キャスターが移動したのを確認して俺はワザと隙だらけのフリをした。

もちろん、敵を生け捕りにする為だが・・・

「さあてど、釣れる魚は雑魚かそれとも……大物かな？」

獲物がかかるのを俺はゆっくり待つことにした。

ランサー視点

「うう……あの野郎」

よつこもよつて、俺の一一番嫌いな奇襲をやられるとまよ……
しかも相手は、この前の眼帯の男。
あいつにはバゼットを助けてもらつた借りもある、こんな汚い方法
で殺したくは無い。

「……くそ」

俺が愚痴りながら進んでいくと、標的のあの男がいた。
しかし、隙だらけもいい所である。

何をしているかといふと、寝ているのだ……いびきを掻きながら。

「こんな任務時に限つて都合のいい野郎だ……」

俺は少し悲しい顔をしながら、槍を出したまま一突きこしよつとした。

しかし、その突きは男を貫通しなかった。

「なつ！？」

「ふむ・・・やつぱり、ランサーか」

「てめえ、寝たふりをしてやがったのか」

「普通はあんな所で寝る奴はいないと思うがな・・・」

「確かによく考えたらそうだな」

俺は再び槍を構えてニヤリと笑った。

「だが、これでいい。これで正々堂々の戦いが出来るつてもんだ・・・
・行くぜ！」

俺は槍を構え、男に突撃した・・・

「おいおい・・・交渉がしたかったんだがな」

「あ？ 交渉だ？」

「ま、いいか。闘つてからでも・・・お前もその方がいいだろ？？」

「へつ！ 分かつてんじゃねえか！！」

「・・・この戦闘狂が」

俺は百鬼宗近を構えてランサーを迎撃った。

ランサーが俺の心臓目掛けて槍を突いて来るが、俺はそれを刀で何とか防いでいた。

「くつ・・・流石に速いな」

「どうしたーその程度かよーー。」

「なり・・・・」

俺は居合ごとの構えをとつてランサーを俺の射程範囲まで待つた。

「はー何だそりやあーー！」

ランサーは構わず俺に槍兵得意の突撃を繰り出してきた。
俺はそれを居合いで迎え撃つた。

「居合ー

如月ーー

「つかーー。」

俺の居合ごとをランサーは間一髪の所でかわした。

正直かわされたのはショックだったが、そんな事をしている場合じゃない。

「ランサー、どうだ？俺達の仲間にならないか？」

「ああ？お前らの仲間だあ？」

ランサーは槍を消して、俺の事を少し見ると頭を搔きながら叫びついた。

「まあ、正直今のマスターにはうんざりしてんだ。しかし、どうせ
つて俺を仲間にするんだ？」

「方法はあるむ・・・キヤスター出ててくれ

「呼んだかしぃ？」

「お前の宝具でランサーを開放してやってくれ

「ああ、それで私なのね・・・・」

「話が早くて助かる」

キヤスターが懐から変な形の短剣を出すと、ランサーがビックリしていった。

「おーおー・・・何する気だよ?」

「安心しろランサー、これはキヤスターの宝具『破戒すべき全ての符^{ルールブレイカ}』と言つてあらゆる魔術の生成物を初期化する事が出来る宝具だ。ここまで、言えば分かるよな?」

「ああ、成る程な。しかし、俺の新しいマスターは誰にするんだ?」「ん?そりゃあ、もちろんキヤ

「私は嫌よ」

「何でやねん!?!」

思わず突っ込んでしまった俺。

ちょっと、待てよ・・・じゃあ、誰がやるんだよ

「あなたがやればいいじゃない」

「は?俺が?そんな事可能なのか?」

「ええ、一度私が宝具を使ってあなたがランサーに召喚の呪文を唱えればいいわ」

「え、でも俺召喚の呪文なんて知らないし、魔力は持つのか?」「召喚の呪文なら私が教えてあげる、魔力は・・・まあ頑張って」

「ええ・・・・」

「ま、よろしく頼むぜ?新マスター?」

「まだなつてねえよ・・・それと、俺の名前は政宗だ」

その後、俺はランサーのマスターになった。

どうせやるなら、アサシンのマスターの方がよかつたのだが・・・まあいいとしようしかし、魔力が何とか持つてよかつた・・・

さて、士郎の様子が気になるし行つて見るか・・・

俺達は士郎たちのいる城へと向かつた。

英雄王包囲網結成ー！（前書き）

武士道です。
更新遅くてすいません。

英雄王包囲網結成！！

俺がランサー達と一緒に城に着くと、士郎とイリヤが話していた。
もしかして・・・成功したのか？

「政宗ー..どうやら、そっちも終わつたようだな？」

「あ、ああ。それより、説得の方はどうだ？」

「ああ、途中から遠坂やアーチャーが協力してくれたお陰で何とか

成功したよ」

「そうか」

俺は士郎の話を聞き終えると、イリヤの方へと向かった。

イリヤは少し警戒してゐる様子だった。

・・・困つたな

「・・・俺の事覚えてるか？」

「前にバーサーカーを一回も殺したお兄ちやんでしょ？覚えてるわ
よ」

「そりゃ良かつた。ところで、同盟は組んでくれるのかな？」

「ええ。その代わり私も士郎の家に住まわせてもらつけどね」

「イエス！！」

嬉しさの余りガツツポーズをしてしまつた俺。

周りの視線が痛いが気にしない。

・・・しかし、綺礼の奴どうするつもりだ？

流石にギルガメッシュと言えどこの勢力に勝てるとは思えないし・・・

ランサーももう使えない、残る駒はギルガメッシュのみ。

もしくは自分自身が闘うとでも言つのか？

・・・・馬鹿馬鹿しい、サーヴァントに只の人間が勝てる訳がない。

「政宗？」

「うお！？ セイバーか・・・」

「大丈夫ですか？ 少し顔色が優れないようですが・・・」

「いや大丈夫だ。少し考えすぎただけさ・・・」

「そうですか？ それならよいのですが・・・」

セイバーはそう言つて土郎達の所へ行つてしまつた。
俺が少し溜め息を吐きながら腰を降ろしているとランサーが話しかけてきた。

「おい政宗」

「今度はランサーか？どうした？」

「お前・・・綺礼の事で悩んでんじゃねえだろうな？」

「・・・・つ！？」

「やつぱりか・・・」

何故こいつは勘がこんなに良いのだろう・・・・?

あれか？野生だからか？

あつ、犬か？犬が関係してんのか？

「あんまり考えすぎはよくねえぜ？ 実際、俺もあいつが何を考えてんのかは分かんねえ。

だが、1つだけ分かる事がある・・・

「・・・それは？」

「あいつはお前に興味を持つてるって事だ

「何だと？」

もしや、イレギュラーである俺に気付いたとでも言つのか？

いや・・・おそらくは俺の考え方に対するものだろ。ひ。

しかし綺礼よ、俺にお前を満足させる程の考えは無いぞ？

「政宗・・・大丈夫か？ あんまり考えすぎは良くねえぞ？」

「ありがとよランサー。俺はもう大丈夫だ・・・それじゃ今日はこれで解散！」

俺がそう言つとキャスターとライダーは自分達のマスターの家に、しかしそ他のサーヴァントは全て士郎の家に集まつた。

士郎邸にて

中々・・・カオスだな。

俺は今まで広かつた茶の間を思い出しながら言つた。

俺の眼前には四体のサーヴァントとそのマスター達が机を囲んでいる光景があつた。

そういうば、七騎のサーヴァントの内の四騎もあつまつてんだもんな

こりや、飯も大変になるぞ

ふいに庭を俺が眺めると、今まで綺麗な月が見えていたのに・・・

そこには巨人が立つっていた。

仕方ない・・・いつちょ言つてやるか。

俺はバーサーカーに声をかけよつとした。

「・・・・・」

卷之三

俺は無言でバーサーカーから目を逸らした。

無理・・・ぜりてえ無理！！ 田を合わせただけで殺されそつだ！
体に穴開きそうだもん！！ あいつ田からレーザービームでも出や
うとしてんじゃねえのかー？

「政宗？」

「ん? 何だよセイバー」

「早く取らなー」と、飯が無くなつてしまひますよ?」

俺が食卓を見ると、ランサーとセイバーが既に戦を始めていた。

「やばい！！俺の飯が！！」

あれ？政宗
それ俺のおかげだぞ！」

マスターに譲るもんじやねえのか！？」「

「はっ！ 飯にマスターもサー・ヴァントも関係ないね！」

二
八

すると、俺が箸で掴んでいた筈の餃子が無くなっていた・・・

「な、何だと・・・・・」

俺が周りを見回して犯人を捜すと、何故か俺の隣の奴がモゴモゴいっていた。

「セイバー」

「な、なんふえす？（です？）」

「何食つてんだ？」

セイバーは口にあつた物を飲み込むと満足そうに呟いた。

「餃子ですが？」

「確か、餃子はランサーが持っていたので最後だつたよな？」

「そうですね」

「お前・・・とつたな？」

「人の事を言えないのでは？」

「ぐ・・・・この腹ペコキング

「・・・・」

「痛い！？」

俺が悪口を言つた瞬間、セイバーの鉄拳が飛んで来た。

それは見事に俺のボディに当たった。

「み、鳩尾・・・・」

不機嫌そうに顔を振つたセイバー・・・俺を無視して飯にがつつくランサー。

何か今日・・・ついてないな。

そして、俺の分のおかずはランサーとセイバーの胃の中へと消えた・

その後、俺は自室で就寝した。

ランサー？ ああ、あいつならバゼットさんの所へ行つたよ。

せつぱり、心配何だらうな・・・何せ、元マスターでしょ？確かに
さて、それじゃ寝るところですか・・・

そして、俺は昔の夢を見た。

英雄王包囲網結成ー！（後書き）

「飯の時間帯は夜です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6963v/>

戦国のセイバー

2011年12月15日22時51分発行